

放送人の会

No.90
2021.2.12
訂正版

〒102-0094 千代田区紀尾井町1-1 千代田放送会館 3階 Tel&fax03-3221-0019 Mail info@hosojin.jp

発行 一般社団法人・放送人の会 会長 今野 勉

編集担当 伊藤雅浩 (広報委員長・編集長)、菅野高至 (HP担当)、鈴木典之、

コロナ禍の一年でした。そして…

放送人の会 会長 今野 勉

同じ言葉をあまり何度も聞かされた時などに「耳にタコが出来る」と言ったりするが、昨今の「コロナ禍」なる言葉などその類であろう。

私も新年早々の会報にその言葉を使いたくないのだが、やはり、放送人の会の活動も大きな影響を受けているので触れないわけにもいかない。「耳タコ」状態の皆様のご容赦を願って、「コロナ禍」のご報告をする。

総会及び放送人グランプリ贈与式ができるかどうか

今期最後の理事会は二月六日の予定であったが、書面による参加という形になってしまった。三ヶ月後の五月十五日に予定されている総会と放送人グランプリ贈与式が出来るか、どうか、今のところまったく予測できない状態である。理事の任期の問題もあるので簡単に延期できない。放送人グランプリは、何とか選考の作業を進めて結果をだすことができたとしても、全国から受賞者の方々をお呼びするのは、どうだろう、と危惧の声があがっている。

受賞については発表するが、贈与式は先に延ばす、ということになるやもしれない。

まさしく「コロナ禍」である。誰の目にも見える「コロナ禍」である。しかし、

目に見えない「コロナ禍」もある。

日韓中テレビ制作者フォーラムから脱退したあとのアジアの放送人との交流についての動きの頓挫

目に見えない「コロナ禍」の一つがこれである。そのことを痛切に思い知らされてくれる新聞記事があった。二月六日の、毎日新聞の、韓流ドラマについての記事である。

昨年、ネットフリックスで世界一丸〇か国に配信された韓国のドラマ「愛の不時着」が日本でも大きな話題になった。パラグライダーで飛行していた韓国の財閥の令嬢が、事故で北朝鮮に降りてしまい、そこで出会った北朝鮮の生真面目な青年将校と恋に落ちてしまふという設定で、韓国と北朝鮮の国情の違いからのチグハグがドラマに笑いをもたらすと同時に、それぞれの国の現状があまりだされてくる、というドラマであった。

記事によれば、このドラマを制作したのは、スタジオオドラゴンという制作会社で、企画、資金調達、制作、配給を、すべて同社で一貫して行っている、という。

私たちが、日韓中テレビ制作者フォーラムに参加していた数年前は、韓国からの参加者はほとんどがテレビ局の人間で、スタジオオドラゴンのような制

作会社は目立ってはいなかった。聞くところによると、スタジオオドラゴンの設立は二〇一六年とのことだが、今や、韓国の人気脚本家三人をはじめ、制作スタッフ等二百三十人の人材を抱えた大会社になっているという。

韓国のドラマ制作状況は、数年前とは全く変わってしまったているのだ。

空白を取り戻すために

「コロナ禍」のこの一年、私たち放送人の会は、中国や韓国の放送事情を知る機会を失っただけではなく、アジア諸国の放送人との交流という新たな目標への動きを封じられてしまった。

これからのように動くべきなのか、動けるのか。同記事の記者、大野朋嘉子氏のスタジオオドラゴンへの質問に対する同社の返事はこうだったとある。

「韓国市場での激しい競争が、世界市場での私たちの競争力につながっていると考えています。韓国ドラマには誰もが共感できる普遍的な魅力があり、優れた筋書きを新鮮な視点と共に描いている点で、世界的に受け入れられる理由ではないでしょうか」

「コロナ禍によるホームステイの増加」がネットフリックスに幸いしたとの説もある。しかしそれは、テレビにとっても同じであったはずだ。コロナ禍明けに、私たち放送人は、未来に向かってどう動くべきなのか。私たちは問われている。

年頭所感

今回、これまでの放送人グランプリ各賞の受賞者の方(非会員を含む)にも執筆をお願いしました

あけましておめでとうございます

阿武野勝彦

コロナ禍の中、皆様、お元気でいらつしやいますか。このたび、放送人の会からのお計らいで、放送界の大先輩の皆様、当方の近況などをお伝える機会を頂きました。受賞の折のことから書かせていただきます。

思い起せば、2008年、第7回放送人グランプリの報を受けたのは、東海テレビの編集室でした。確か、堀川とんこうさんからでした。優しいお声でした。都を離れ、華やかな中央放送界とは遠く、地方でコツコツとでも時代を描けたらと一生懸でしたので、想像もしていない幸せの電話でした。個人で賞を頂くなど考えても観なかったので、しばらくフワフワした気持ちで、仕事が覚束なかったことを覚えていきます。しかし、申し訳ないのですが、「放送人グランプリ」の存在は、その時初めて知ったのです。地方の制作者にとって放送人の会は、とても遠いものでした。

グランプリのトロフィーは、我が家の床の間にありますが、見ると思いつくエピソードがあります。贈賞式の時、「これ琉球ガラスなんです。ここにこんな字を彫ってなければ、値打ちがあるだけだね」と、放送人の会の名前で言われました。「こんな字」とは私の名前でした。そのシーンを思い出すと、クスツと笑ってしまいます。その後の受賞者は、ホ

ームページで見ると、「なるほど、こんな人がいるのか」と放送人の会の大先輩たちの目配りに、いつも感服しきりです。

さて、受賞から13年が経ちました。40代だった私も63歳になりました。受賞後は、テレビでは「司法シリーズ」を齋藤潤一ディレクターと続けるとともに、戸塚ヨットスクール、長良川河口堰、四日市公害など地域であった「オオゴト」のその後を追うシリーズを制作してきました。グランプリの授賞理由で「裁判長のお弁当」徳山ダムその後『約束〜日本一のダムが奪うもの』を讀えてくれたことが、大きな後押しとなったかもしれませぬ。

2011年、自分たちのドキュメンタリーを多くの人に観てもらうために、テレビ放送したものを再編集して映画化する『東海テレビドキュメンタリー劇場』を始めました。映画人にとってテレビドキュメンタリーは、一段下のように思われているのに少々驚きました。映画化については何作かテレビの先達の作業はありましたが、単発で終わらず2作は作品を続けることを映画館と約束して、ようやく上映に乗り出すことができました。2作どころか、『立成ジレンマ』『青空どろぼう』『死刑弁護人』『長良川根性』『約束〜名張毒ぶどう酒事件 死刑囚の生涯』『ホームレス理事長』『神宮希林』『ヤクザと憲法』『ふたりの死刑囚』『人生フルーツ』『眠る村』と続き、いま12作目『さよならテレビ』、13作目『おかえりたいた』が、コロナ禍を縫うように、全国行脚の途上です。1万人の入場者があればヒットだと言われるドキュメンタリー映画ですが、『人生フルーツ』は、26万5千人が劇場に足を運んでくれたし、地方での自主上映では600回10万人が観てくれています。また、私たちの活動が呼び水になって地方の素晴らしいドキュメンタリーが映画となって世に出たこと

は、とても嬉しいことでした。

映画作品はテレビ番組と違って、長い命を持つようになり。自分たちの表現が、映画作品となり、そして再び放送界に戻ってくる、そうしてテレビが再び見直されるといふループを夢想しました。杉田成道さんのCS日本映画放送が加わってくださり、映画となったドキュメンタリーはローカル放送を越えてゆきました。そして、何年かの時を経て、地上波で放送されるようになりました。ささやかなことかもしれませんが、テレビを元気にするループが形になりました。

映画化は、この先、何作つづけられるかわかりませぬ。しかし、スタッフの志は衰えることなく、必ず受け継いでくれると思っています。

『人生フルーツ』の制作途中、主人公の「コツコツ、ゆつくり」という言葉に触発されて作った詩を書きます。「風が吹けば枯葉が落ちる。枯葉が落ちれば土が肥える。土が肥えれば果実が実る。今は、果実を実らせる枯葉のような気持ちです。風に吹かれながら、舞う時を知り、導いてくれる土の上に落ちよう、そうすれば、きっと立派な実がついてくれる。そんな心持ちで過ごしたいと思っています。

本年、みなさまのご健康とご多幸をお祈りしています。2021年正月

追記

コロナ禍だからこそと自分ごとディレクターとなつて取材に出ています。身体も気持ちも思うにまかせず、わが身の至らなさを知る毎日です。いまは、地元の中日新聞に『エンタ目』の連載を月に一回書き、テレビとラジオの批評誌『GALAC』に去年12月まで37回連載した『テレビ砂漠の歩き方』を加筆・構成して、本年6月に出版できるよう動んでいます。(東海テレビ放送 再雇用セネラルプロ

デューサー 東海テレビ「約束〜日本一のダムが奪うもの」などで第7回放送人グランプリ受賞)

あけましておめでとうございます

市村元

「試練の先に未来を拓く」をテーマに掲げた昨年の第40回「地方の時代」映像祭は皆様の多大なご助力のおかげで、小さいながらも充実した大会として開催できました。今年「未来を拓く」歩みを少しでもゆつくり先に薦めたいと思います。変わらぬご支援をよろしくお願い申し上げます。

(会費)「地方の時代」映像祭／関西大学

「あなたまた戦争ですよ」その後

大沼潤

5年前に山形放送を定年退社しました。現在は、系列の東北映音(制作プロダクション)に籍を置き、かろうじて現場にしがみついているといったところです。

さて、山形放送は2年前(2019)にも第33回民教協スペシヤル「想画と綴り方」戦争が奪った子供たちの「心」を制作し、民放連盟賞最優秀賞を受賞するなど高い評価をいただきました。想画とは戦前の小学生が自分の貧しい生活をありのままに描いた絵、綴り方とはそれを作文や詩に書くことです。貧しさから抜け出すためには何が必要か、自分の頭で考えようというのが指導した教師・国分一太郎の意図でしたが、共産主義の思想ありとして警察から摘発・投獄されました。貧しい生活を見つめることで「社会制度の矛盾」にたどりつくことを警戒してのことでした。

山形放送が「民教協スペシヤル」を制作するのは、「あなたまた戦争ですよ」以来14年ぶり

で、地方の制作者にとっては一生に一度あるかないかの大事事です。いまさらですが、後輩たちの努力をねぎらいたいと思います。

ところで、この番組には戦時下の学校のイメージカットとして、ある映画の一部がたびたび登場します。「戦う少国民・総決起篇」と題された白黒フィルム映画で、昭和18年冬、山形県の大曾根村国民学校を舞台に撮影されました。クレジットには「指導「軍事保護院」とありますかられつきとした国策映画です。少国民とは、天皇陛下に仕える「小さな皇国民」という意味です。昭和16年に小学校は国民学校と改称され、学童は少国民と呼ばれるようになりました。

映画では、鉢巻きに上半身裸の男子児童たちが掛け声勇ましく雪だるまに竹ヤリを突き刺し、女子児童たちは前線の兵隊に送る慰問袋を縫っています。戦勝祈願では校長先生が勇ましく「鬼童平英」を唱え、全員がこれを唱和します。ドキュメンタリーの体裁をとっていますが、出演する子供や村人たちは台本で指示された「雪国の模範的な皇国民」をけなげに演じています。子供まで戦争に動員せざるを得ない逼迫した戦局がうかがわれる貴重な映像です。

このフィルムは現在大曾根小学校の校長室の金庫に保管されています。映画の完成版ではなく、記念に寄贈された編集ラッシュのようですが、敗戦後は村の宝として占領軍の目をのがれて天井裏にかくしていたとのこと。

国策映画ですが、この映画から学ぶところも多くあります。国家は国民に対して「ものいわぬ忠実な大多数」であることを求めました。それは小学校教育から周到に始められました。従うことを尊いことと教え、やがてNOと言えない社会が出来上がりました。その社会は

本流にさからう小さな『異物』をあぶりだし排除しようとしています。国分一太郎の綴り方指導はその『異物』だったのです。

話をもう少しと、実は映画「戦う少国民」は、4部作として全国4か所の国民学校を舞台に撮影されました。

- ① 鹿児島県 前之浜国民学校（農漁村篇）
- ② 愛知県 八幡町第一国民学校（大都市篇）
- ③ 山形県 大曾根国民学校（農村村篇）
- ④ 横浜市 西前国民学校（大都市篇）

このうち、④の西前国民学校の映像は存在が確認されていてネット上でも見ることができますが、①②については確認できていません。どなたかご存じの方がおられないでしょうか。

〔東北映音代表取締役 非貧員〕「あなたまた戦争ですよ！残された妻たちの手記」で第4回放送人グランプリ受賞

コロナ禍とジェンダーギャップ

大類 なぎさ

コロナ禍による出勤抑制で、在宅時間が増えたためか、昨年はドラマを見る時間が増えた。特にTBSテレビドラマ「私の家政夫ナギサさん」は面白かった。仕事一直線だが家事は苦手な20代独身女性と、「おじさん家政夫」とのラブコメディ。

経済的に頼れる男性と結婚するのが、女性のスタンダードであったのは遙か昔、今は女性も男性以上に必死に働かなければならない時代だ。夜遅くまで働いて帰宅すれば、「疲れて」家事をする気力もない」と思うのは男性も女性も同じである。

そんな時、家事を代わってくれる家政婦さんがいてくれたら…。では、ドラマのような「家政夫さん」ならどうか。

そういえばかつて、男性から淹れて貰ったお茶を「美味しい」と感じたことがあった。

東日本大震災が起きた2011年の夏。当時アパート住まいだった私は、隣の部屋に引っ越してきた暴力団関係者に悩まされ、山形警察署を相談で訪ねたことがあった。

警察なんてできれば、一生お世話にならない。まして相談を担当してくれたのは、凄みの利いたマル暴の刑事さんだった。

だか、出されたお茶はよく冷やされて、夏の暑さなど吹き飛ばすような美味しさだった。

職掌柄もお茶出しはするが、「お茶には会話が途切れた時に持て余した「間」を繋ぐ役割がある。当時お茶を淹れてくれた警察官はその気遣いを心得ていたのだろう。

どのような仕事にも意味があるし、それを理解しているのであれば、お茶くみをする男性がいても、家事を仕事とする「家政夫」がいてもいいと思う。

年末年始は、新型コロナウイルスで職や住まいすら失った人が「年越し支援・コロナ被害相談村」に殺到したという。

また先日、大学病院の医師による診察を受けた時にこう告げられた。

「もう、救急医療は崩壊ですよ。大きな病気はしないように気をつけて下さい」と。

この言葉から、逼迫した医療現場にいる医師の「とにかく目の前の命を救わねば」という、並々ならぬ覚悟が感じ取られた。

コロナ禍で誰もが追い詰められた生活を送っている。このような状況を乗り切るために必要なのは、「男だから（なのに）」「女だから（なのに）」と「ジェンダー」という言葉に捕らわれて、諦めたり決めつけたりすることではないと思う。むしろ男女の違いや能力差等を互いに認め合いながら、「助け合う視線」で共存していくことなのではないだろうか。

そのうえで「何でも食ってやる」という開き直ったエネルギーが欲しいと思う。

医療従事者に感謝！

荻野慶人

昨夏、外出中の私は突然歩行が難しくなり、住宅街の石垣や塀を伝うように帰宅した。

数年前の杉並区民健診で心臓に障害が見られるので精査するよう指示され、近くの久我山病院で三か月毎に定期検診を受けていた。

「やはり手術を考えましょう。高齢でいらっしやるから、TAVI（経カテーテル治療対応の病院がいいでしょう）」と、担当医に榊原記念病院を紹介された。

病名は大動脈弁狭窄症。心臓弁膜症の一つで弁が硬く開き難くなり、失神や突然死を招く怖れもあると言っ。

9月2日から四日間の心臓カテーテル検査と9月11日から半月の経カテーテル大動脈弁置換の治療を受けた。手術は二時間弱だが、その後、心電図・X線・血液の検査と歩行のリハビリの他は、点滴の管につながれてベッドに横たわっているだけの期間が長い。

最後に12月7日入院9日朝退院の短い治療（無症候性心筋虚血を仕上げ、人並みに自宅で年末年始を過ごすことが出来た。今は医療従事者諸兄姉に感謝感謝である。

高校の同窓生に医師は多いが、子供の頃から私は医学部を視野に入れたことがない。フイクションで赤ん坊やお爺さんお婆さんの命を幾人か救ってきたが、現実には人命を助けることに無力なおのれが口惜しい。

街中が賑わう正月も、新型コロナウイルス感染症と闘い続ける過酷な医療現場に向かい、深く頭を垂れる私である。

私たちの仕事の「一番むつかしいお客さん」、それは乳幼児である。幼児人々は自分が「おもしろい！」と思うものしか見ない。大人と違って、「流行っているから」とか「役に立つから」とかの理由では決して見てくれない。だから、「そんな手強いターゲットであるなら」と、コンテンツ作りに共に挑戦してくださる出演者・クリエイターの皆さんには、日々感謝の言葉しかない。彼らとの出会いや表現をめぐる丁寧なやり取りがあったからこそ幼児番組の制作を続けることができた、というのが正直なところである。

そして今、新型コロナウイルスによって翻弄されている、数々の親子参加のイベントや収録。「一番むつかしいお客さん」は、コロナ下のさまざまな状況に一番大きな影響を受ける可能性がある存在でもある。「外に出ない」「人と会わない」「いろいろな物に触らない」「大勢を避ける」「生涯のスタートラインから、無理難題が満載の道を歩み始める彼らに、私たちは何を送ることができるのだろうか？

VR等の手法を使って新たなメディア世界を用意する、それももちろん大切である。だが、私は今こそ原点に立ち返りたいと思う。ただ、原点には困難がさらに積もっているかもしれない。子ども一人ひとりが「おもしろい!!!」と思うことを「大切な人と共有したい」「そんな願いを、私たちは後押しできるかどうか……」おもしろい「これは人によって本当に多様であるのだけれど、その多様を創り出せるかどうか。例えば、「会えないなら、どうやってタッチしようか?」「体が動かかせないなら、何で遊ぼうか?」回答が容易でないと思われる問いの山……。しかし、番組コンテンツの新たな芽はそこにあるのではないだろうか？

ヒントに困ったら、子どもたちに聞きに行くと良い。大人には思いつかないアイデアを持つているのは、彼らだ。——(大人「飛行機で外国にも行けないね」(歳児「ならながれぼしにのつていけばいいんだよ」——私たちの「一番むつかしいお客さん」は、実は「一番頼もしいブレイン」である。スムーズな状況下では忘れてしまいがちな大切なことを、コロナとの闘いという困難が気づかせてくれた、去年今年である。(NHKエデュケーショナル NHK「にほんごであそぼ」で第3回放送人特別賞)

新春を寿ぎ…… 寒河江正

昨年のくれ、12月30日(pm 19:00~20:00)文化放送の年末特別番組に出演しました。「ラジオ聞き酒の会」が出演のキツカケです。テーマ「あなたの故郷はどこですか?」司会・サヘル・ローズ。

コロナ禍の世界を撮る 塩田純

「コロナは僕らを完全に麻痺させた。世界は確実に僕らのことを忘れた」
 去年の春、金本麻理子ディレクターがレバノンのシリア難民を取材した。緊急事態宣言下、困窮してパンも買えず、焼身自殺した父。突然の死に衝撃を受けた息子が語った言葉が私には試写で強い印象を残した。コロナ禍、いずれの国も自国民の救済に汲々としており、取り残されていく難民たち。彼らの苦境を伝える番組のタイトルに、私は息子の言葉を選んだ。
 「世界は私たちを忘れた」

新型コロナウイルスの感染は、最も弱い立場の人々に厳しい犠牲を強いている。国際的

な救援物資も十分に届かない難民。とりわけ女性と子供への抑圧が強まっている。番組は家庭内暴力や児童労働、さらに売春や臓器売買にまで追い込まれたシリア難民の過酷な現状を伝え、大きな反響があった。日本国内でも緊急事態宣言下、非正規雇用者、女性、外国人労働者、難民：社会的弱者が苦境に立たされている。こうした人々の声を伝えるメディアの一端を担えればと考えている。

これまで私は、憲法の制定過程やアジア諸国と日本の関係など近現代史をライフワークとしてきた。コロナ禍の今年、取り組みたいテーマがある。日本の感染症対策の歴史を植民地統治や戦争のなかで見つめなおすことだ。

いま、二つの切り口から迫ろうと番組制作を進めている。一つは、最近、公開された旧日本軍の防疫給水部の名簿だ。太平洋戦争下、日本の軍医たちがマラリア、デング熱などの感染症対策にどのように取り組んだのか、そして、その人脈が戦後日本とどのようにつながっているのか、名簿を基に追跡していく。もう一つは旧満州の奉天(瀋陽)で感染症と向き合った満州医科大学の知られざる歴史だ。75年前、本国から忘れられ、満州で難民、棄民とされた日本人居留民の多くは、実は発疹チフス、ペスト、コレラなど感染症で命を落としていたのだ。詳細については、今年、放送予定のBS1スペシャルで明らかにしたい。「期待ください」。(NHKエデュケーショナル 特集文化(特集事務局) 制作幹事 NHK「神聖喜劇ふたたび」作家大西巨人の闘い」などで第8回放送人グランプリ受賞)

音声メディアの持つ力に期待を

島修一

2010年に小松左京氏の小説「日本アバ

ツ氏族」を翻案したラジオドラマ「鉄になる日」を制作し、「放送人グランプリ」奨励賞をいただきました。尊敬する放送業界の先輩方から評価していただき、大変誇らしく嬉しく思ったものです。まだまだラジオドラマの灯を消すわけにはいかないと奮闘しております。

その後、ラジオドラマの認知度を上げ、新しい才能を発掘したいと考え、2016年から「月刊ドラマ」と共同で、「MBSラジオドラマ脚本コンクール」を開催しました。第1回の最優秀作をラジオドラマ化した「5拍子の福音(脚本：鎌桐ぼたん)」は、第71回文化庁芸術祭優秀賞、第54回ギャラクシー賞選奨、日本民間放送連盟賞優秀賞受賞などの評価をいただくなどの成果をあげることができました。しかし、ラジオの営業状況の悪化もあり、残念ながら第3回をもってコンクールは終了しました。制作費も時間もかかるうえに営業セーブルスに直接つながらないラジオドラマを制作することは、民放ラジオにおいて、ますます厳しいものになっていくことを実感します。

しかし、一方で明るい話題もあります。ネットの発達で、メディアが多岐にわたるようになりましたが、その中で音声メディアが見直される兆しがあるようです。ラジオなどネット経由でのラジオ聴取はすでに一般化していますし、ポッドキャストで配信されるラジオ番組も増えています。またスマートホンのアプリでも、個人がおしゃべりを発信して即席DJになれるものが人気だそうです。「音での表現」に興味を持つ若い世代が増えているとしたら、まだまだ音声メディアは力を保ち続けられるのかもしれない。

「ラジオは説得のメディアである」とは、ベテランパーソナリティ浜村淳氏の名言ですが、耳で聞く「音」の持つ力は衰えることはないはず。時代は変われども、その力を信じて、

新しい技術や用語に苦労しつつも、残りの放送人生を「音」にこだわりながら、じたばたと頑張りたいと考えている2021年初頭であります。しかし、50代後半のおっさんとしては「コンテンツ」とか「ブランニング」などのカタカナ言葉には背中がむずむずしてしまいます。デジタイズ、マッチングビジネス、DX化、BtoC・あー日本語で言ってるなー！

（株式会社毎日放送 ラジオ局編成部局長 非会員 ラジオドラマ「日本アパッチ族」で第11回放送人奨励賞

三角山放送局23年目

杉澤洋輝

2021年、あけましておめでとうございませす。はじめまして、札幌市西区にあるコミュニティFM、三角山放送局と申します。三角山放送局は、「いっしょに、ねっ」をステーションの理念とし、多様なヒト、多様な組織、多様な価値観が出会う場として、1998年に開局しました。放送人の会館ランプリで表彰いただいた、前社長木原くみこは2019年1月に残念ながら他界いたしました。受賞の際は、大変お世話になりました。ありがとうございました。

開局から23年となり現在は150名の市民がマイクの前で思いを届けています。地域メディアとしてのラジオは、多様な人たちが集うのに適した「社会装置」と捉えています。これは発信者も受信者も互いの顔が見え、互いに領域を行き来しあうという地域メディアの特徴かもしれません。既存のコミュニティでは出会わない人たちが、三角山放送局への参加を通じて知り合い、新しい活動や価値を創造することがなによりも楽しいです。

「いっしょに、ねっ」の理念における達成目的とは、地域のさまざまなプレーヤーが交わり、お互いを分かり合うことで、わたしは「地域リミックス」と呼んでいます。その目的を達成するために、手法としてラジオがあり、イベントがあります。ラジオは、問いかけのメディアであり、そこに言葉と声を擁した文学的かつ身体的なメディアともいえます。声のコミュニケーションだからこそ、お互いを読み合い、思いやり、感じようといます。決して突き放しません。だからこそラジオは、「共感確認メディア」であり、「異論受容メディア」といえるのです。

ラジオとイベントは、一對の存在であり、シナジーを生む組み合わせでもあります。本来、イベントとは、場（空間）の共有であり、リアルコミュニケーションでの確認だったのですが、2020年はコロナ禍でラジオがどこまでイベントを補完できるのか、それを試行するよい機会でした。

いままで、音楽コンサート、地域の手作り雑貨マーケット、自然栽培農作物や加工品のマーケット、いっしょにねっ文化祭、ピンクリボン活動、がんサバイバーフォーラムなどの主催イベントのほか、地域のおまつり、商店街や町内会行事のサポートなど、多様なイベントを手掛けてきました。しかし、コロナが感染拡大し、人が集まる場づくり、人を集めるきっかけづくりが、ままならない状態になりました。

かねてから、「いつでも、どこでも、誰でも」というのは、三角山放送局の長年の開発目標でした。スタジオに来ることは前提ですし、会うことができずとも作用を生み出すことは自明ですが、来られないかたもいます。スタジオに来られない人がラジオやイベントに参加できないのは、弊社の理念上、容

認できないことでした。《参加したいのに、参加できない人があつてはならない》という考え方は、「いっしょに、ねっ」の理念に内在しているものであり、包摂社会・共生社会・ダイバーシティを実現する意味でも、誰一人取り残さないSDGsにも通底しています。これまでも、電話での出演、ネット回線を使用している出演はありましたが、コロナの状況下に合わせて、ラジオのリモート出演、オンライン出演での参加が著しく促進されたのは、歓迎すべきことでした。

また、本業に移すとリアルイベントが軒並み中止となり、売り上げが大きく落ち込みました。あらゆる業界に影響があったので、スポンサー各社も厳しい経営を強いられ、放送収入も下がっていきました。そんなときに声をかけてくれたのが、町内会や地域の青少年育成委員会、地元商店街、西区役所のみなさんたちでした。彼らも予定していた行事や事業ができなくなり、こんな時こそ、地域の一体感を醸成しようとしてラジオを使ってくれたのです。いつもは事業活動に時間が割かれ、日常的には腰を据えて着手できなかった活動周知CMや広報啓発のCMだったり、ステイホームの中、増加していた家庭内暴力、児童虐待への相談ダイヤル周知CMだったり。9月には、例年実施している敬老の日の祝賀会

ができないので、ラジオで敬老の日を祝ってほしいという相談がありました。放送局ではじめて、「敬老の日を祝う特番」を放送しました。地域に支えられてこれまで23年間、地域メディアとして地域活動に寄り添ってきたことが、少しだけ実を結んだような気がしました。これからも、地域を映す「声」として多様な形態の思いの交換を続けていきたいと思えます。

（纏らむれす 三角山放送局 代表取締役社長 非会員 故 木原くみ子前社長が第7回放送人特別賞）

湘南高校サッカー部 関 佳吏

2021年は母校湘南高校サッカー部が創立百年を迎えます。サッカー部の百年史を5年ほどかけてまとめました。サッカー部の植松二郎先輩（織田作之助賞受賞作家）が最終執筆を担当。読んで面白い作品を目指します。

「湘南蹴球百年誌」 夏頃には上梓できる予定です。

（tvkミニエーションズ取締役相談役 神奈川県サッカー協会副会長

20年前の志を忘れるなかれ！

曾根英二

第1回の放送人グランプリを頂いてから20年なんです。スマホで探すと51歳と若い私と喜びの声が会報の一面にありました。授与の理由が嬉しいです。「時代の中の放送人のあり方に常に前向きな挑戦を続けたことに対して」とあります。

豊島産廃問題などの報道と番組制作の継続的努力と成果。01年のドキュメンタリー『島の墓碑』構成と演出を褒めてくださっていました。

私の受賞の弁は「志、現場、普通の人の視線を大切に、優しさや怒りを持った放送を続けたい。テレビジャーナリストらしく」というものです。現場に生きる言葉を見えます。

その後どうしてる？ですが、豊島の人たちの「豊かな島」回復への力が描く一方で、『限界集落』を3年ほど継続放送、『吾の村なれば』が副題の拙著で毎日出版文化賞をいた

できました。

2010年で定年、大阪の阪南大学に7年、新幹線通いで学生たちと向き合いました。夏休みのゼミ合宿を豊島でやり、全国から毎年8つの大学の学生が参加の「島の学校」に合流、産廃の山の上で、「重く考えないと」と茫然と立つ学生に目をみはりました。東日本大震災のボランティアにもゼミで毎年行きました。

テレビは？2年に1本のペースで古巣でドキュメンタリーを作り放送して来ました。豊島の決着を見届けてやろうという思いもありました。1990年の産廃事件発生の半年前から豊島の継続取材ですから、今年で31年です。中坊さんが住専債権回収で部下の責任をとって、弁護士バッチを外す苦悩の生活を『報道特集』で報じたりもしました。公害調停成立10数年で島を訪れるため新幹線から降りる中坊さんに小型のカメラを回して「どうも」とだけ声をかける私。中坊さんは「こんにちは、どうも、小さいカメラ回してへへ」と、『どうも』には『どうも』で返すお茶目な弁護士さんの苦境をどう伝えられたか。

そして、17年3月28日、産廃撤去の最終船が豊島の現場を離れました。ドキュメンタリー『風がぬ時化はない』になりました。最近のテレビに思います。「記者の顔が見えない。制作者の顔が見えない」と。まるで、パワーポイントのテレビ版、被写体と切り結ぶような緊張感がない。強い者と弱い者がいたらどうする？が不鮮明。

重要なことを忘れるところでした。放送人の会のメンバーに入れていただき、放送人の先輩たちと話ができる幸せを感じてきました。日中韓も。多謝。(山陽放送「豊島の産廃廃棄物問題」などで第1回放送人グランプリ受賞)

丑年の春

鶴橋康夫

「根分けした木瓜の花咲くマスクして」…。閉門塾居状態の僕は、『逢いたいなア、あの人に』と、ハーモニカでも吹くしかありません。「木瓜が咲く酔わず狂わず抱き合つて」です。スタッフ・キャストを頼りに、そろそろ、撮影の準備です。とにかく無事を祈っています。

うぐいす

松尾羊一

早朝の庭でうぐいすが鳴いています。下手くそな鳴き方で…とにかくおめでと〜ございます。今年はどうな社会が展開しますか？老いたうぐいすは「晩年」をからかっているでしょう。晩年を生きる「生残り」はむつかしいものですね。

コロナ禍の取材

村上雅通

今年の年越し、私は、熊本市の藤崎八幡宮で取材していた。1月15日まで続く神社の正月祭祀と初もつでの人たちの声を収録するためだった。18日の放送で、実質18分のVTRを制作するのだが、結果的に12日間ロケに通った。取材慣れした神社側も「こんなに回教来た取材は初めて」とあきれいていた。

ただし、カメラクルーがつくのは2日だけで、あとは私自身が回すデジカム取材だ。カメラ操作の苦手意識が先立つて、長年、撮影だけは避けてきたのだが、必要な映像を撮るために背に腹は代えられない。おそるおそる始めたが、これが実に面白い。時間さえあれば、いつでも取材現場に行けるし、対象者と直に向かい合える。今回の取材では、コロナ対策に悪戦苦闘する神職たちの素顔が収録できた。

制作費を考慮した苦肉の策。技術的にはプロのカメラマンには到底及ばないが、自らの狙いに素直にアプローチできることを改めて認識した。

唯一の弱点は「心のある音」がとれないことだ。カメラに内蔵されたマイクが周囲の音を拾ってしまうため、狙った音がぼやけてしまう。カメラを取材対象者に近づけ、「音の芯」にアプローチする努力をしてきたのだが、最近、それが出来ない状況になっている。

先日、放送局から「取材対象からは2メートル以上離れて取材する」という新型コロナ対策が通知された。これまでも出来る限りの対策は講じてきたのだが、2メートル以上離れた収録は「音」としては致命的と言わざるを得ない。さらに「対象者の自宅での取材も避けて欲しい」とも書かれていた。

このことは「対象者の生活の場(職場、自宅)で、できる限り近づいて」を指針にしてきた私にとつて、取材の根幹を揺るがす事態となっている。

実は、半年以上前から、コロナ禍の影響を受けている取材もある。水俣病をテーマに掲げた1時間のドキュメンタリーだ。取材対象に高齢者が多く、しかも、その中には水俣病の患者も含まれている。物語の核になる人たちの了解は得られたのだが、なかなかロケには踏み切れない。病をうつすことの懸念とともに、マスクをした対象者からは、真の声と表情は伝わりにくい。一方で、彼らが関わる裁判や行政不服審査は肅々と進んでいる。ちよっぴり焦りながら、取材のありようを模索している。

放送人グランプリ特別賞をいただいた時、選挙の対象になったのは、水俣病 4作目となる「水俣病 空白の病像」だった。私が関わった、水俣病のドキュメンタリーは13作にな

った。14作目の取材対象は支援者たちだ。70年代から80年代にかけて水俣病患者を支援する若者たちが全国から水俣にやってきた。今も30人程度が水俣に暮らしている。

詳細は控えるが、かれらの思いは第二世代に引き継がれようとしている。両親とともに裁判の支援に携わる女性、大手新聞社を退職して患者に寄り添う元記者など30代、40代の支援者たちは水俣病事件とどう向き合っているのかを撮りたい。

おそらく、私の水俣病に関わるドキュメンタリーの制作は、これが最後になるだろう。自らの理想とコロナ禍の現実をどう噛み合わせるのか、模索する日々が続きそうだ。(熊本放送「水俣病 空白の病像」などで第2回放送人特別賞)

特別賞受賞から10 数年

矢島良彰

2006年に制作した「民衆が語る中国激動の時代 文化大革命を乗り越えて」(NHK BS特集)で放送人グランプリ特別賞を頂いた。この実に歯切れの悪いタイトルにはそれなりの訳がある。文化大革命から40年の節目にあたり番組制作を思い立ったが、最大の難関は中国当局が取材許可を出すかどうかであった。思案の末に思いついたのが「私の人生アルバム」として申請することであった。文革の10年も長い人生の一部であり、編集段階になってテーマを絞ったという次第である。ともあれ明らかかな偽装であるが、「上に政策あれば下に対策あり」とは、中国の庶民が良く口にする格言(?)で、これぐらいは許される、そんな空気が当時はまだ残っていた。取材申請だけでなく、上からの一方的な規制に対して、庶民なりにあの手この手で対策を講じる、社会

の「ずき間」が機能していた。それからわずか10数年しか経っていないが、規制は大幅に強化され、対策を講じることが先ずいで難しくなっていました。

一昨年放送の「中国 改革開放を支えた日本人」(NHKBS1スペシャル)は、改革開放政策を始めるにあたって鄧小平がモデルにしたのは日本であったこと、日本もまた官民挙げて技術協力、資金援助を惜しまなかった歴史を掘り下げた番組であった。番組は故大平正芳首相の「もつと発展して欲しい、けれども世界から期待され尊敬される国になって欲しい」という発言で締めくくっている。戦後、日本の指導者は侵略した過去に対する贖罪意識もあって中国支援に取り組んだが、そこには、経済発展によって民主化が実現するに違いないという思いがあった。中国の知識人の多くも同じ認識であった。それがどのような姿でやって来るのか、親しい友人と「和平演変」云々と語り合ったことが懐かしい。(NHKBS「民衆が語る中国・激動の時代」で第6回放送人特別賞)で

やねだん取材16年

元南日本放送キャスター 山縣由美子



2008年制作「やねだん」人口3000人、ボナスが出来る集落」では、「日韓中テレビ制作者フォーラム」グランプリや放送人グランプリ特別賞をありがとうございます。放送界の尊敬する先輩がたや仲間の皆様から選ん

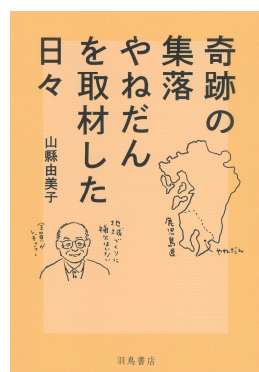
でいただいただけに、格別の喜びが私の中に灯り続けています。鹿児島県鹿屋市の柳谷集落(愛称やねだん)の地域再生が始まって25年、継続取材は16年になりました。注目している変化を少し報告します。

集落の総人口に占める14歳以下の割合が5%から13%に増え、ついに全国平均を上回りました。やねだんの地域再生を子ども時代に体験した世代が、一度は故郷を離れても続々とUターンし、心強い次世代が育っています。

「やねだん故郷創世塾」は開始から14年、やねだんのリーダー豊重哲郎さん79歳を塾長に、行政、福祉、教育、民間企業など様々な分野にやねだん魂を継いだリーダーが生まれ、全国ネットワークとなっています。2019年、豊重さんは総務省の「ふるさとづくり大賞・総理大臣賞」を受賞されました。コロナ禍でも熱気あふれるオンライン塾が開かれています。

韓国にできた「居酒屋やねだん」は10年の歴史を刻みました。国交正常化以来最悪と言われる日韓関係やコロナ禍にも負けず、民間交流の底力をみせています。

私は、と言いますと、命に関わる病気で休職したり、2014年以降は母校九州大学理事として大学経営に携わるなど、右往左往の10余年でしたが、苦しい時ほどやねだんから教わったことに励まされました。どんな逆境でも「自分たちの居場所は自分たちで良くする」という気概、「地域づくりに補欠はいない」と誰も見捨てない愛情深さ。



2019年、長年の夢だった取材記を出版することができました。「奇跡の集落やねだんを取材した日々」(羽鳥書店)という本です。今、世界が様々な危機に揺れる中、持続可能な世界を目指す国連の目標SDGsが静かに浸透しています。その根幹が「誰ひとり取り残さない」という精神ですが、思えば、「誰ひとり取り残さない」を自然体で実践してきたのがやねだん集落でした。やねだんの記録が、どんな現場で心血を注ぐ人にとつても応援歌となることを願っています。(南日本放送「やねだん」人口3000人 ボナスが出る集落」で第8回放送人特別賞)

二つのテーマ

山路家子

1月28日、日比谷公園内のホールで映画を観ました。「悠久よりの愛く脱ダム新時代」

監督金子サトシ・制作矢間秀次郎。矢間プロデューサーが何十年も追求めてきたテーマです。「森は海の恋人」の阜山重篤さん、京都志明院の田中真澄住職をはじめ、全国各地の思慮深い方々が自然を守ってきたことが判ります。京都鴨川ダムの建設を止めた中には、梅原猛、岡部伊都子・懐かしいお名前もありました。終映後、公園の鶴の噴水まで参りました。1958年4月、NHK入局の私は、研修を経て、「社会部社会課」に配属されたのですが、

課長は、案内のO氏に小さな声で「うちには女の子は要らないんだよ」、でも聞こえた。彼は私に「身のふり方を決めるから、日比谷公園にでも行って午後に来なさい」。その頃、NHKは公園のすぐ近く、内幸町にありました。そこで時を過したのが鶴の噴水のベンチ、差別を強く意識したはじまりでした。幸せなことに、当時社会課にあった「日本の素顔」の朝の訪問、「時の動き」などのスタッフは、仕事に夢中で、差別する暇など、ありませんでした。最近「白人男性が第1、第2は黒人男性、第3白人女性、第4黒人女性」と、差別の順位をオンラインで聞きました。なぜ人は差別をするのか、そう問いつつ続けてきたジャーナリストの話です。

「BLM」今こそ真剣に取り組まなければならない、それが平和への第一歩である、と私は信じています。

この1年、出会って感動した本は、藤原章生氏の「松葉書にされた少年」。感動した映像は、中筋純氏の「The」、10分程のYouTubeで見ることが出来ます。それぞれのQRコードが送ってきましたが、入手なりたい方はお名前、住所を書いて左記のメールに連絡ください。

Rottemaier-ik@docomo.ne.jp

ダム問題などの公共事業、BLMなどの差別問題、これからの人生のテーマです。

春が来た

吉田賢策

春を思わせる気候にスニーカーを履いて駅を目指したが、途中でひきかえした。一月十六日のこと。目的地は東京青山、向田邦子没後四〇年特別展で、51歳台湾で急逝した彼女が駆け抜けた生涯を辿りながら、若い才能とコ

ラボするというユニークなもの。年末に交通事故にあり、コロナ禍のなかでもこのイベントだけはという気持ちはあったが、家で大人しく彼女の小説を読み直す方を選んだ。

自分は主として報道・編成系の仕事をしてきたが、元々はテレビで「おしゃれな恋物語を造りたい」という夢があった。学生時代好きなドラマとして観ていたのがそんな「S.Hは恋のイニシヤル」その脚本家の中に松木ひろしとともに向田邦子の名もある。「七人の孫」他多彩なジャンルを書いていたのだ。局に入ってから、あの「だいいんの花」チームにはなかなかつまずかず、同期のADやSHPの方が南青山で台本待ちをしていた話などを後年うらやましく聞いたものだ。別の向田作品でスタッフの末端に加えて貰った興奮はいつでも覚えてる。

自分にとっての記憶は突然四〇年前で途切れる。台湾取材旅行の直後の日時で、ある作家を交えての会合の設定を上司に命じられた。向田さんも大変に楽しみにされて、出発のまさに前夜、場所日時の再確認を電話で、「自身されてきたのである。歯切れよくウキウキした声のトーンは忘れない・

Pの合津直枝さんはイベントと共に、テレビで素敵な贈りものを届けてくれた。一九日夜BSで「向田邦子の真実」という番組を制作放送してくれる。妹和子さん、大石静さん、菅野高至さん他の証言で、「家族というもの」「女の静かで熱い情」の意味を描き出し、今尚時代を刺激する向田文学を読み解く。

事故の翌年新春ドラマとしてテレビ朝日で放送されたのは「春が来た」。演出はフリーとなった盟友久世光彦。今回のイベントの名前は「いま、風が吹いている」…春は近い。

「故郷の空」受賞から

青森放送 渡辺英彦

放送人グランプリで奨励賞をいただいたのは2011年の事でした。高橋竹山生誕100年記念番組「ラジオドキュメンタリー「故郷(ふるさと)の空だ」制作スタッフとして表彰されました。高橋竹山は言わずと知れた津軽三味線の名人です。この番組は芸術祭大賞放送文化基金賞本賞もいただき私のディレクター人生の中で最も思い出深いものとなりました。

私は昨年11月で定年となり、現在嘱託としてラジオ番組の制作を続けています。1983年に青森放送に入社して以来、社員人生のほとんどを番組制作に携われた事で、様々な経験を積み上げてきたと感じています。

入社した当初、非常に個性の強い先輩ディレクター達から叱咤される毎日でした。いつも「何がやりたくて放送局に入ったのか？」と問い詰められ、にわかには答えることのできない自分に忸怩たる思いの連続でした。

当時のディレクターの大先輩の一人に、「番組制作は自分の歌を歌う事です」といつも言っていた安達尚彦さんがいました。

安達さんは、1978年青森放送のラジオで、目の不自由な人たちが自ら企画、取材、パロナーリテイまでを務める「RAB耳の新聞」(週1・20分番組)を立ち上げた人物です。上司だった安達さんが、この番組作りからは人として得るものが多い、と熱く語り、私を「RAB耳の新聞」の担当ディレクターに導きました。

目の不自由な人たちは、音に大きく頼って生きています。ですから気付きや発する情報は非常にラジオとの親和性が高くなります。

私は安達さんが大切に育んできた「RAB耳の新聞」から「音」やラジオでの「番組作り」について多くの事を学びました。

「RAB耳の新聞」は今でも私の後輩ディレクター達によって受け継がれています。過去から現在に渡って、その放送活動がもたらなくなって生まれた番組の数々が、芸術祭賞やギャラクシー賞、連覇賞などを受け、高く評価されてきました。

2010年、高橋竹山生誕100年の年に、私は竹山の肖像を伝える番組を担当することになりました。

番組を作るにあたって読んだ「評伝 高橋竹山 魂の音色」(東奥日報社刊)の中に、目が不自由だった竹山はメモ代わりに自分の日常のつぶやきをカセットテープに吹き込んでいるという記述がありました。竹山の孫の高橋哲子さんに伺うと、そのカセットテープを保存しており、その音声はそれまで放送メディアで紹介されていなかったという事でした。

聴かせていただくと、竹山の肉声で多数の公演スケジュールや、口笛を吹き帰郷を楽しみにする様子などが録音されていました。この時私は、素顔の竹山の新たな魅力に出会ったと思いました。

構成は、私にラジオの番組作りを教えてくださいました。もう一人の先輩ディレクターで、すでに青森放送を退職していた須藤喜夫さんに相談し引き受けていただきました。

番組では、孫の哲子さんやお弟子さんたちの証言、哲子さんが保存していたカセットテープ、竹山の余興芸や最晩年のビデオ音声演奏とともに織り込み、あまり知られていない竹山の人となりをお届けしようと努めました。

竹山は家族が止めるのを押し、亡くなる間際まで故郷の町民に無料で演奏会を開いて

いました。須藤さんは、竹山が自らの「若いも人生として人々に伝えようとしていたのではないかと提案し、番組をより深いものにしていただきました。

この番組の制作はけっして楽なものではありませんでしたが、その分、須藤さんが在職していた時より、親密に番組制作ができたことは忘れられない貴重な時間となりました。

市井にある「感動」「喜怒哀楽」からささやかな光を見出し拾い上げ、番組で発信していくこと。番組を視聴する人たちとその光を共有し、お互いに「生きる糧」にしていくこと。それが今に至る私の番組作りの思いです。(青森放送「故郷の空」で第10回放送人奨励賞)



2010年竹山の孫高橋哲子さんに取材する筆者

放送スダラシム！下馬評座談会

—恒例の下馬評座談会をお届けします。グランプリのノミネートの参考にしてください。前号に掲載した「バンドミック関連番組」に続くドキュメンタリー中心の資料は別刷りで挟み込みましたが重要なところは座談会の中でも触れられています。文頭のA、B、C…はいつものように段落記号とお考えください。

【総論】

A 総論ではコロナ、トランプ、安倍政権から菅へということになるが、忘れられそうなので学術会議任命問題をあげておきたい。映画人からは反対の声明がすぐに出た。放送人は出さないのかという会員からの声がある。6年前、安保法制反対の声明を出すときは大変だったが何とか出した。

B 安保法制のときは言論表現の自由が侵される、強権的に制約されるという怖れに思想界、メディアの強い危機感があったが、学術会議の任命問題は学問の自由の問題でなく、学術会議のあり方など違う問題にうまく転嫁されて、われわれに届きにくいところで処理されてしまった。いま、放送メディアには反対し世論を盛り上げる力がない。

C コロナの中で、リモートなど通信と放送はせめぎ合いながら共存し、どちらかという放送より通信系の方がまさってきたというメディア状況だと思ふ。

放送に在る人は基本的に組織の人で、積極的に声をあげるのは社外の人だ。

D 局が一時制作を中断し6月に再開したとき、ATPの側から局のガイドラインを知りたいと言つたNHKも含め局は部外秘として文書を出さなかった。口頭でやっと説明しただけだ。組織を離れてものをいうのは難しい。**E** 基本的にはファクトを知らなければ喋ることではない。われわれはメディアが伝える

る情報をもとに判断する。それが正しいかどうかの検証は実はできない。どのメディアが正しいかわからない。それをもとに菅首相が正しい、おかしいと言えるのだろうか。

A 国会の質疑を聞くと、菅総理は「仮定の話には答えられない」と言う。未来を想定した問題ばすべて仮定の話だ。それをメディアがつつこんだ様子は伝わっていない。山田真貴子内閣広報官が「工社1賞間で、追加質問は許しません」という状況だ。直接取材ができない、伝聞の情報しかない状況で、どんな発言ができるのか。個人としてもが言いにくいのに、放送人の会という組織としてもをいうのは難しいという印象だ。

B しかしファクトが明らかかなものはある。学術会議で何人かが任命されなかったのは明らかだ。仮定の問題に答えられないことを突っ込まないのはメディアの怠慢だ。

C いろんな見解があるなかでものを言うことが難しい立場はある。**D** いま大事なものは軽やかなフットワークで疑問を投げかけることだと思う。声明という力強い形でなくて、もっと素朴であっていい。問題提起をする力が弱っている。例えばコロナについてPCR検査がこんなに少なくて大丈夫か？という素直な疑問。これをみんな言っているのに深まっていかない。そこでは専門家のグループにくっついて科学的な記者と正義を振りかざす社会部記者との組織的

な葛藤みたいなものがあつてロックがかかる。素朴な疑問を突き詰めて行く作業がどうも手薄になっていると思う。それで事態は次々と展開して行ってしまう。学術会議の任命はおかしなことなので、その疑問は出して行くべきだろう。スピード、フットワークが重要だ。

E 放送人の会がどうするか議論はこれくらいにして、放送が学術会議をどう扱ったかを言おう。あの問題は杉田和博官房副長官がキーマンだ。彼がリストを総理に見せたことは明らかだが、国会に出てこない。それを追求したのがTBSの「報道特集」だ。そして前川文科相事務次官。文化功労者についても口をだしてきた。「報道特集」は戦前の京大の滝川事件にふれ、あれが一里塚になって学問の自由、言論の自由をどんどん制限していったと伝えた。

A NHKでは「ニュースウオッチ9」で首相に、予定にない賞間で有馬キヤスターが「学術会議」について突っ込んで官邸を怒らせた。「NHKのガバナンスはどうなっているのだ」と怒っているそうだが、あの局面で「分り易い説明を」と突っ込むのは当たり前だ。首相が怒っていると週刊誌にもだが、多分事実だ。

B 「ニュースウオッチ9」の現場はこのことであらう。多少のハレーションはあるが、萎縮することはない。前とは違う。

C 問題は上だ。経営を握っている上と現場のギャップはNHKだけでなく、民放各社にもある。

D この時期は予算審議でNHKにとっては鬼門にあたる。予算が質にとられている。

A 昨春秋、日米のトップの交代があつたわけだが、アメリカはバイデンが勝つたというよりトランプが負けた。この報道の量は物凄かった。それに比べ日本のトップの交代を報ずるものは質量ともに極めて少ない。自民党

の総裁選は幕が上がった時芝居は終わっていた。候補の3人はそれぞれ資質も政策も違うものを持っていて、きちんと伝えれば安倍政権の総括になるはずだった。それがなくて、政局があつという間に動き、令とおじさん、とか秋田の雪深い農家出身の苦勞人とか報じられた。

B 菅は政権を取ったら、ケイタイとNHKに間違いなく手をつたつていく、と予想していた。総務大臣のときやつていたからそう思ったのだが、予想通りだ。彼は政治理念などの理念で動く人ではなく、実利で動く。人もそうだと思つている。菅はそうやって生きてきたからだ。

彼は実利を信じて言葉信じない。人に語りかける言葉を持っていない。答弁の空疎さが見ての通りだ。

C ここへきて案の定ケイタイとNHKに手をつたつてきた。ケイタイは安い方がいい。数社で寡占の状態だから、解約は難しいなど問題は多い。しかし、政権が民間企業のやり方にあそこまで縛りをかけていいのだろうかと思ふ。ケイタイの値下げはばたばたと進んで、NHKの値下げがきた。前田会長は多少の抵抗をしたがほぼお手上げだ。武田総務大臣にやられつ放した。

D 波の問題もある。ラジオを簡単に2波を1波にするとか、BSを一つにするとか、乱暴だ。これで困るのはいい仕事をしている制作会社だ。地味なドキュメンタリーなどを作っている制作会社にとってNHKBSはなくてはならない存在だ。そんなことを無視してことを進めていいのか。

A 波のことはそれぞれ声明を出していいと思ふ。中長期計画がどうなっているか詳しくは知らないが、BSの2つが一つになる、ラジオの第2がなくなるというのは既成事実のよ

うに現場は動いている。

B 新聞は全紙「NHKは値下げしろ。スリム化しろ」と書いている。新聞は自社と繋がっている民放がNHKの力を削ぎたがっていると思っただろう。その認識は間違いで、NHKの力が弱くなって民放にいいことはなにもない。メディア間のヘゲモニー争いで新聞がテレビを叩くという事情はあるが、いまそんなことをしている場合なのか。NHK、民放あわせての放送は必要じゃないのか。健全な批判をする観点はないのか。

C これはメディア間の競争で起こっていることでなく、政権がやっているから問題だ。NHKへの介入はいずれ民放にも来るだろう。

D 今の記者会見のやり方に民放労連が抗議したが、現場はどうなの？

E 社としてのんでいるから…コロナだから1社一人。東京新聞女性記者望月衣塑子はでられない。NHK、民放各社の社長記者会見もそうだった。1社1人、追加質問は許さない。ひどいものだ。それを認める記者クラブも記者クラブだ。

A 軽いフットワークでやわらかく、しなやかに、不規則質問をどんどん出そう。

B 安倍が「放送法4条はやめちゃう」と言ったときとか、NHKのあり方はこれでいいのかもしれない。これに対して放送人の会はどう発言するのか。個人の集まりとして自由に討論することが重要だ。

C NHKラジオ第2放送廃止は昨年8月にできて、年が明けたら前田会長は既成事実として動き出した。民放はAMからFMへと動き出して、NHKがAMを守れないのは困る。

D これは重大な制度変更だから普通は総務省の研究会か審議会で第3者を入れて検討する。今回そんな場も設定しないで秘密裏にや

っているようにみえる。

A トップリーダーが爆弾発言をしたらそれで動き出すように、どこの組織もなっている。

B 日放労は完全に沈黙だ。

【パンデミック関連番組ほか】

C そろそろ具体的な番組の話しよう。今年はコロナ一色だが、会報の前号に「放送メモ・パンデミック関連番組」の膨大なリストがあるのでその中から、目ぼしい番組を拾っていく。

D まずE TV特集「緊急対談 パンデミックが変える世界と海外の知性が語る展望」4月11日(土) 23・00〜60分。道傳愛子さんがいい。なんでもっと使わないのだろうか？

E 英語は実に達者で、NHKワールドJapanでもやっている。この番組のあと4月25日、同じE TV特集でもユヴァル・ハラリに聞いている。

A 4月、この時期にはワクチン開発は1年か2年かかる。日本のワクチン開発はどうなっているのかと議論した。日本の薬品メーカーは儲からないワクチン開発はこれまでやっていない。BS1スペシャル「ウイルスvs人類2〜カギを握るワクチンと治療薬〜」4月25日で触れた。

B BS1で7月に東大の医科学研を追いかけてワクチン開発の現場をぼそぼそとやっていた。日本も必死にやっているのだが、結局お金がない。

C BS1スペシャル「封鎖都市武漢〜76日間 市民の記録〜」(5月4日)は力作。テムジンの制作。凄い記録だ。

D E TV特集「リモート調査報告 マスクが消えた日々〜医療現場をどう守るか〜」はリモートでしか聞けない悲しい時期の作品。マスクのことがよくわかる。

E これは面白かった。リモートのハシリ。Dの川さんが自宅からリモート取材する。

A BS1スペシャル「見えない敵を見る ミクロの目で迫る新型コロナウイルスの正体」(6月27日)。CGでコロナを活写する映像を作った瀬尾拓史さん。これも全部リモート。

B キリオコースという制作会社で瀬尾さんはお医者さんでかつCGクリエーター。人から話を聞いて全部CGにしちゃう。それも2週間ぐらいで。

C Nスペ「タモリと山中伸弥 人体vsウイルス〜驚異の免疫ネットワーク〜」(7月4日)。この時期、新型コロナがわかる決定版になった。分かり易くしたのはタモリの功績だ。

D BS1スペシャル「レバノンからのSOS〜コロナに追い詰められるシリア難民〜」(7月12日)。秀作。性暴力に苦しめられる少女臓器売買。悲しすぎる。

A Dの金本麻里子さんはこれまで戦争に拘って数々の秀作を作った。現在の戦争の現場で難しい取材対象とよほどの関係がないと撮れないものを撮っている。

B コーディネーターで通訳の中川稲子さんがいた。

C 金本さんは自分の作りたいものを作るため椿プロを興した。経営者でありながら凄い仕事尾をしている。2年前前日本記者クラブ特別賞を受賞している。

D この番組は金本さんにとっても節目となる作品でおそらくいくつかの国際賞を受賞するだろう。

E 世界が忘れていたシリアの難民だ。この番組は世界に出して恥ずかしくない。

A 制作統括に東野真、塩田純という目利きが入っている。

B BSなの語りが大竹しのぶ。これがうまい。



前川英樹氏



渡辺紘史氏



八木康夫氏

C 2020年芸術祭の優秀賞を受賞している。

D 『ズームバック×オチアイ』（7月12日〜全4回）。筑波大学齊合陽一准教授がNHKの資料映像を編集したもの。ちよっとクセがあるけどリモートで授業を始めたのがちよっと面白いと思った。日本のデジタル対応は20年遅れていると怒っていた。

A 聖マリアンヌ医科大学病院は6月感染クラスター発生。「新型コロナウイルス」として「生と死」の記録。医療最前線「密着の3ヶ月」（7月19日）は医師自らも記録のために撮影。以後NHKと親密な関係だ。

B 「新型コロナ いま 第2波への備えは？ 医療現場からの警告」（7月26日）は武田真一がキャスターでこの時期に警告したのだが、政治は何にもせず医療現場は崩壊を起している。医療崩壊については何回もやっているが、政治には届かなかった。

C 「シリーズ人体、驚異の免疫ネットワーク〜新型コロナとの戦い〜」（8月2日）はさすがに「人体チーム」で、CGを駆使しての番組の見せ方のノウハウは素晴らしい。わかりやすかった。

D ハートネットTV「困った！どっつする？ ろう難聴者のウイズコロナ」（8月18日）はなるほどと思った。マスクで口の動きが見えない。困っているところを見ないと言っている意味がわからない。

E 医療崩壊については9月にもやっている。「在宅クライシス〜医療・介護 最前線の闘い」（BS1 9月12日）撮影Dの下村幸子さんは、1昨年グランプリの奨励賞受賞だが、よく撮っている。

A 10月に入ってガイアの夜明け「独占取材！ 大戸屋 買収劇の真相〜外食初の敵対的買収 独自取材6ヶ月」。さすが日経新聞

の情報ありだと思った。ドラマみたいで株の買い付けで敗れた社長が泣いている。

B ニュースでも大きく扱っていた買収劇だ。C 「よりそい 静寂と生きる難聴医師」（10月10日）は難聴の人が医師になって苦労する。難聴の医師がいることは病院にとってメリットがある。なるほどと思ったが医学用語のやりとりは難しい。口元の見えるマスクをアメリカから取り寄せたが大きすぎて使えない。日本のメーカーに頼んでいま試作中だ。CBテレビの制作。

D Nスペ「令和未来会議 新型コロナの不安 どう向き合おう？」人を集めて喋らせているのだが、武井壮、赤江珠緒などを読んで何を言わせたかったのか。

E ETV特集「調査ドキュメント〜外国人実習制度を追う〜」（10月17日）。20年前から実習生10人を取材しているのだが、技能実習機構への取材がない。要は移民の問題で、誤魔化して儲けている奴がいるのに、その誤魔化しているところへの取材がない。

A BS1SP「ただ自由がほしい 香港デモ・若者たちの500日間」（10月25日）。語り・撮影の香港人カメラマン匿名のFさん。制作著作はNHK大阪だが、誰がどんな経路でこれを手に入れたかはマル秘。「ゴンジュ、港の豚と書く、食べることにしか興味の無かった若者たちが戦いに目覚めた。日本のみなさん香港の現実を知ってください」とメッセージ。

B ハートネットTV「特集京都ALS患者囁く 託殺人事件」（11月3日、4日）。第1回が「視線でつづった586日」第2回が「安楽死をめぐって」。安楽死の問題についてはやや論理的に流れたが情報は深くきちんとまとまった作品だ。

C ETV特集「親の隣が自分の居場所〜小堀先生と親子の日々〜」（11月20日）。森鷗外の孫で東大病院で手術だけしていたが定年後在宅医になった。真面目過ぎる子どもは危ない。死ぬ。ちゃんぼらんが長生きする。

D ETV特集「転生する三島由紀夫」（11月28日）。没後50年、死んでも時代と併走する男はいるものだな、と思った。いまの若者に三島を分かり易く伝えた。

E 「真実への鉄拳〜中国・伝統武術と闘う男〜」（BS1、11月29日）。テムジンはこういうものも作るのか。総合格闘技家が「中国武術は実戦の役にたかない」と軒並みに破って行く。すると中国国冢が活動を制限。統制はあらゆるものに及ぶと非常にわかりやすい。

A JNNドキュメンタリー「ザ・フォークス・スペシャル」記者たちの眼差し 戦後75年の開戦の日を前に」（11月29日）TBSがこれまで何回かやってきたシリーズで、JNN各局の20代から50代の記者たちが自分とのかかわりを探り作っていた。各8分程度。記者の研修作品だが、これがいつか花が咲くのだろう。

B 東日本大震災の時から何回かやっている。震災の時各局から現地へ応援に行った。そのときの記者たちが報告した内容は凄く良かった。その後8月15日に「記者たちの眼差し、戦争編」を作った。1人称のオムニバスでみなそれぞれいいものだった。

肝心なのはこれからの3月で、震災10年目を1人称でどう語るか期待している。

C 記者の中には自ら被災した人もいるし、取材中足元まで水が来て慌てて近くのビルへ駆け上って助かった人もいる。

D 統括・構成は沖繩の瀬永亀次郎の映画の監督をやった佐古忠彦。今回、もしきびしくつよかった。

E 1人称の8分は新聞で言えば小さなコラ



菅野高至氏



新山賢治氏



小川和久氏

ム。小さなコラムが書ければ1ページの記事が書ける。見ている中に優れモノがいる。

A この中で面白かったのは「北海道と沖縄」。記者ナギーブ・モスタファ。沖縄出身でBBCの記者。大叔母は1945年6月沖縄で日本兵に殺された。なおかつ沖縄では北海道出身者1万人が犠牲になっている。それを北海道の記者になって初めて知ったという。

B SBCの「責任を作った手塚孝則はすべて満洲にこだわってきた手練れだ。頑張ったが、一人ぼっちという悲しい話だ。その責任は送り出した方が、それとも国なのか」という作品だ。

C 東海テレビが公共キャンペーンCMを作った10年。これのレベルが高い。交通事故、食の問題、LGBTとか毎年テーマを設定して作っている。戦後70年のときは戦争がテーマで、若い記者がおばあちゃんに戦争体験を聞くとか、ネット右翼に取材したりしている。ギャラクシー賞のCM部門の大賞を受賞、全日本CMフェスティバルで民放の作品として初めて大賞を取った。東海テレビはドキュメンタリーで有名だが、報道部員がCMを作っている。今年ギャラクシー賞の報道活動部門に「30秒のジャーナリズム」と題してこのキャンペーンを出品している。

D ETV特集「ひきこもり文学」(12月5日)。文学というのか、引きこもる人の手記を集めた。本人の朗読と自撮りのドキュメント。社会に合わせないが社会に迷惑をかけない危うい均衡を保って、心に溜まる言葉を掻き出している。トランスジェンダーの女性はコロナでみなマスクだから、外出しても見られていない感じがしている、という。

E それでも「自分を見て欲しい。自己表現したい」という欲求はある。

A 定点観測としてカメラが部屋の中に置いてある。引きこもってべたべたとなっていた映像もある。よく取材を許してくれたと思う秀作だ。

B クローズアップ現代「認知症の私が認知症の相談のつてみたら 見つけて生き甲斐」(12月17日)。認知症になった人が認知症に悩む人の相談にのる。「人の役に立つ喜び、認知症でもできることはできる」と日記に書いた。ふわっとした後味のいい番組だった。

C Nスベ「患者が命を終えたい」と言ったとき(12月26日)「家族に苦しむ姿を見せたくない」「延命して家族に負担をかけたくな」という患者の訴えに医師はどう向き合っているのか。

D 2年前「彼女は安楽死を選んだ」をやったスタッフが渾身の制作。途中嘱託殺人の事件があり、視点を思いつき変えての制作だ。途中で、凄じバツシングがあった。よくここへ辿り着いた。

E リターンマッチなんだ。

A 最初、医療関係がなく、今回医療関係をやった。よく持続したと思う。

B 国際医療大学の荻野美恵子さんは「患者に本当の覚悟はない」と言う。

C BS1SP「アウシュビッツ死者たちの告白」(12月27日)。8月放送の続編。レンガに名を刻んで帰還したユダヤ人。収容所の庭を掘るとメモが出てきた。メモに書かれていた名前を追った。

D アウシュビッツにいる人を管理するユダヤ人を命助けられる立場にいたが一人は助かり一人は死んだ。その遺族が訪ねてレンガの父の名に会いに行く。興味深く、重い話だ。

E これも文化庁芸術祭の優秀賞。スクープと言っているものなのにNHKはスクープだと言わなかった。NHKのスタッフがみつけたもので外国人のスタッフの名前はない。

A ETV特集「エリザベス」の世界に愛を(1月23日)。難民支援に走り回っているエリザベス(ナイジェリア人)の1年半を追った。テムジンの制作。

B BS1「あのときタクシーに乗って緊急事態宣言の東京」(8月3日)タクシーの中に12台のカメラを置いて、アトラダムに乗って行くお客さんとの対話で全部構成している。コロナでいろんな迷惑を蒙った庶民が運転手と話す。運転手は4人出てくるがみな個性的で面白い。コロナ禍の中の庶民の暮らし、収入が減った運転手、それだけでナレーションはない。コロナの状況を理屈を言わずストレートに描いて面白かった。

C ETV特集とBSには期待できるが、Nスベはダレントを入れトークで少しでも若い40、50代を取り込もうとしている。NHKとして一番大事にしたいものをETVやBSにまかせるのはいかがなものか。Nスベの担当者は「旧来型のドキュメンタリーは要らない」と言った。猛省を促す。

D 総合放送はリーチを欲しがっている。Nスベも最初は30代も言っていたが、最近それは無理だとわかってきた。「人体」のシリーズも、ジオジャパンもダレントを使っている。

E 調査報道はやらないの？

D 素材を出すことにおそれがあった、それで視聴者を離す結果になっている。

E 視聴率の状況は目テレが強く、ドラマではTBSが2桁をいくつか記録した。

A 日テレは世帯視聴率から個人視聴率に完全にシフトした。中高年は要らないと特化している。民放はみな世帯はとらない。個人だけだ。

B テレ朝の「ぼつんと一軒家」や「人生の楽園」は中高年対象。朝から時代劇をやっている。



伊藤雅浩氏



鈴木嘉一氏



三原治氏

これは営業につながらない。商売で考えると日テレが正しい。

C ドラマはパンデミックで4月期が苦戦した。中断があったりして、よくモチベーションが保つたと感心する。朝ドラは再放送をしたり実に変な形で放送していた。4月期の連ドラでちゃんとした形で放送できたのは一つくらい。後は軒並み中断だ。

D 三密を避けるにはスタジオが使えない。ロケは現場で拒否される。移動していけないと言われて聞えない。

E ドラマ&ドキュメント「不要不急の銀河」(7月23日、NHK)は制作者、出演者などがウイズコロナの中でどうやってドラマが作れるかについて語るドキュメントと、飲み屋の一家のドラマ。又吉直樹の構成、脚本。面白くみた。

A フェースシールドをつけアクリル板を立て、安全衛生指導が5人入っている。

B 5月の緊急事態宣言が終わって6月に入ってから制作の現場には衛生指導員が入って厳密なマニュアルを作った。そのマニュアル通りのやり方を「不要不急の銀河」では見せている。あれでやれば制作は大変だ。表情を撮るのに最初は顔が見えない。アクリル板越しの話で撮影は時間がいくらでもかかる。あの時期、真面目にキスシーンなどはカットした。

C WOWOWが30分ドラマを始めた。何故かトーンが一緒に記憶に残る作品がない。これは原作ものに頼ってオリジナルを作っていないからだと思っ。

D オリジナルを作るにはそれなりのノウハウが要る。作家との関係など。原作ものは手っ取り早い。

E WOWOWもかつてはオリジナルを作っていた。井上由美子のパンドラシリーズは間違いなくオリジナルだ。

A マンガ原作、WEB原作が多くなり、30分あるいは30分を二つにして12分くらいのものの2本立て。ドラマはほとんど細切れになる。

B テレビ東京がいろんな隙間を埋めたり健闘している。水曜日のドラマ3階建て「レンタルなんもしない人」「きょうの猫村さん」「ネット興亡記」など。真夜中の2時ごろやっている。

C そこらでの秀作が「捨てるよ安達さん」。(4月18日〜7月4日深夜。安達祐実本人が安達さんを演じる。ある日、女性誌の編集長から「母号一つ私物を捨てて」と言われ物語が虚実ないまぜで始まる。何人もの脚本家が書いています。

D 同じくテレビ東京のスラップステイックコメディ「浦安鉄筋家族」はヨーロッパ企画主宰の脚本家上田誠のホン。「ふるがー」はマンガ原作「おしやろみエおしやろ」はWEB原作。お風呂と家とで編成が遊んでいる誰がみているのか?のドラマ。「40万キロあなたの恋」は玉田真一の脚本でオリジナル。コロナの非日常と宇宙飛行士を重ねた。

E 「人生最高の贈り物」(1月4日)がいい。石橋冠監督。石原さとみ、寺尾聡、向井理。余命僅かなことを隠して父のところへ来た娘の物語。行間にあるものに包み込まれるようすっかり感動した。

A あれは5年前に出来た岡田恵和のホンでTBSで通らなくてテレ東で通った。Pに八木康夫が入っている。

B テレ東ではこれはこの手のドラマとしては最後になるだろうと評価していた。視聴率は7・1だが、これは全部年寄が見ている。見逃し配信が1週間で100万回。これはみな20代、30代の女性だ。リアルタイムのお客さんは年寄、見逃し配信で若い人と割り切っている。

C 岡田恵和のホンには「姉ちゃんの恋人」(7月、10月、火曜20時)もある。有村架純主演。

D TBSは「俺の家の話」(1月〜金曜)宮藤官九郎の脚本。磯山晶がP。ホームドラマが少しづつ増えてきた実感がある。コロナでみんなホームに居るから、ホームドラマの復権はあるかも。

E 忘れないうちに言っておくが大河ドラマ「麒麟が来る」はコロナによる収録中止、出演者不祥事による代役での撮影し直しなどのトラブルを超え、年を超えての完走を果たした。スタッフ・キャスト、特に池端氏の努力をたたえたい。

A 的確な人物描写、歴史解釈のするとき、従来の歴史ドラマ、本格大河のファンを魅了した。光秀、信長、道三、松永久秀、足利義昭の個性、人間の愛憎、嫉妬などを重厚に描き切り、出演者たちも、その脚本に乗せられ、皆好演であった。

さすが池端脚本、「マクベス」「リヤ王」など、シエークスピア劇を読むような読後感であった、とは、ちよつと褒めすぎか。

B 朝ドラの「エール」はコロナの影響をまともなうけ、山田耕作役の志村けんが死去、スタジオは三密を避ける徹底的な衛生管理で制作に時間がかかり、総本数を減らして何とか完投した。本当に「苦勞様と言いたい」。

A 古関裕而は戦前、戦中、戦後いつもヒット曲を作った。戦中は多くの戦時歌謡の名曲を生んだが、それを戦後どう受け止めたか描くのかと気にして見た。朝ドラは女が主人公で戦争の被害者が多いのだが、古関裕而はどう考えても加害者だ。若者を勇壮な歌で戦地へ送り出した。文化的な戦争犯罪者だ。それが戦後一度は筆を折り、自分を責め苛んで「鐘の鳴る丘」「長崎の鐘」で復活する。単なるお調子

者のヒットメーカーではなかった。

B 演出面では、最後コンサートで終わったのに感動した。「一階堂ふみの歌唱力もさることながら、全責が歌う。ドラマ畑出身でない吉田照幸演出。最初はアニメで始まった。アニメで始まり歌で終わるドラマだったわけだ。朝ドラの長い歴史の中で初めてだ。やってないことをやった演出を評価したい。

E 吉田照幸には3年前、第3回大山勝美賞を贈っている。「エール」ではいろんな困難を乗り越えて完走した力業に感心するが、戦時歌謡から戦後の「長崎の鐘」への転換の描き方は少しきれいなことに過ぎると思った。彼は脚本も書くが、周り議論を深め、独走しないことを望みたい。

A 2022年放送予定の大河ドラマ「鎌倉殿の13人」の演出担当に決まっているが、現在キャストイングは脚本家の三谷幸喜がSNSで発表している。NHKのプロデューサー機能はどうなっているのだろうか?

B NHKに「72時間」という定点観測のドキュメンタリーがある。スーパーマーケット、東京タワーなどで、そこに来た人々を予備知識はなにもなくインタビューして紹介する。一見なんでもない番組のようだが、毎回人間の暮らし、個人ヒストリーが生きて出てくる。これはもう何年かやっている。

C 何故か3日間、72時間というのがいい。大晦日から元旦、2日とやったことがあるが、来る人がそれぞれバラエティーに富んでいてヒストリーをもっている。作っているのは4人か5人の小さなプロダクションだ。

D 民放ではタレントがいるんなところに飛び込みで取材する「ぶらり〜」「××探訪」といった番組があるが、その原点と言っているのが鶴瓶の「家族に乾杯」。鶴瓶が初対面の人にいきなり訪ねて、いきなり話しかける。鶴瓶

だからできる技だが、暖かい人間性が感じられる。普通の日本人のこんな番組に脚光をあててもいいと思つた。

E 『家族に乾杯』はコロナの時期だからと再訪シリーズをやった。新しく会いに行けないので10年前のところに会いに行く。テレ東『家について行っていますか』、テレ朝『ぼつんと一軒家』でも再訪をやっていた。

A BS日テレ『ニコのうた』（月曜 19時）。音大卒のメンバーだけのコーラスグループForestaの演奏。男声7、女声12、ピアノ4のメンバーだがこの種のグループではピカ一。いまや長寿番組。今年の正月は『琵琶湖周航の歌』を歌いながら歌われている琵琶湖の名勝を訪ね歩く拡大版を放送した。

B NHKのドキュメンタリー『ノーナ』に注目だ。放送は不定期、文字通りノーナレーションで、様々なテーマで放送した。見たひとは感想スタンプを記入することができ、これまでのスタンプ数1位は『元ヤクザうどん店はじめます』2位がシリアの少女がつぶやく『ラマーのつぶやき。新しい手法だ。テレビにはまだやっていない、やったことのないやり方、手法はいくらもある』。

C ドラマで言えばグランドホテル方式で一定の空間にいろんな人がやってきてその空間で人生様様が繰り広げられる。

D 『空港、ピアノ』がそうだし、所ジョージの『ダーツの旅』はダーツを投げてとんでもないところへ行くが似たような手法だ。

コロナでやれなかったことを逆手に取ると、いろんなことが出てくる。バラエティでは客席のひな壇に客を問をあげてバラバラにすわらせたが、あれはむしろ客がいない方がいい。そんなことがコロナでわかった。

E リモートの画像が多用されて画質が悪くても伝わるものが伝わればいい、ネット上の

画面と変わらなくてもいいという風潮を恐れる。

D 大島新を紹介したい。元フジテレビでザ・ノンフィクションのDだったが退社してフリー。事務所はネットゲン。大島浩の次男で気骨ある男だ。最近、香川県選出の民主党議員小川純也を17年追った『君は何故総理大臣になれないのか』が異例の大ヒットをしている。日本映画専門チャンネルがドキュメンタリーは商売になるとわかって配信している。いまやテレビの閉塞感を突破するのがドキュメンタリーで、地方局だけでなく制作会社、ドキュメンタリージャパン、ネットゲンに期待する。大島新はもともとテレビの人でテレビの仕事は水準の高い仕事をしてきた。

【戦後75年】

C NSペ『忘れられた戦後補償』（8月15日）日本は戦争で310万人の命を落としたがうち80万人は民間人。国はこの補償をどうするのか。これをしっかり捉えた作品。官僚たちもインタビュに答え、空襲の被害などこれまであまり触れられなかったことをしっかりと捉えた力作。

D 今もコロナで補償の問題はあるが、強いものへは補償するが弱いものへは保守しない。軍人恩給は手厚く、特に階級の高い将官へは高給が支給されている。民間へは沖縄と原爆被爆については特別法で補償が出ているが、日本の補償はまず軍と軍属だけだ。戦後すぐその制度が作られた当時の官僚のインタビュは今の官僚と全く同じだ。「現在の憲法はそのことを想定していない」と言う。

E NSペ『証言と映像でつづる原爆投下全状況』（8月14日）。最初はアメリカに全面取材する予定だったが、コロナで出来なくなり、手元にあったのはマンハッタン計画の責任者の手記だけ。それをベースに昔の巨匠たちの素

材を使って作った。地味だが、若い人には資料を見ることで大きな意味があったと思つた。

【地方局発】

E 地域ドラマを紹介しておきたい。『スナイパー 時村正義の働き方改革』（CBC、3月12日〜3回、前年度？）。大事件に対処する国家機密機関のスナイパーが人事課の女性によって残業はダメ、休日出勤はダメ、きちんと勤務管理しなさいと指示され生き方が変わっていく。これをスナイパーのいる密室で二人だけの芝居でやっている。民放連テレビドラマ最優秀賞、芸術祭優秀賞を受賞。コロナの前に作られているがコロナの状況をふまえた面白いドラマだ。原案を考えたのは『ゴースト』のPだ。

A テレビ宮崎50周年『ひまわりっ！健一レジェンド』。15分の連続ドラマ。昨年はHTVが「チャンネルはそのまま」を作った。HTVには藤村忠寿などベテランがいてドラマを作り続けてきたが、テレビ宮崎には経験がない。これが結構面白い。地元出身のマンガ家、東村アキコの父と娘の自伝風なドラマ。父親は高橋克典、滅茶苦茶なキヤラを演じ、捧腹絶倒のコメディに仕上がっている。国際ドラマアオードのローカルドラマ賞受賞。

B 北海道ではHBCがこれまで数々のドラマの名作を作り、アークイブからCSで放送していたが、いま「ほんかんシリーズ」など北海道地区限定で放送している。北海道のドラマ制作への刺激として評価したい。

C 地方ということでは、『地方の時代 映像祭の実施プロジェクト』市村元氏（当会議員、元TBS、現関西大学学長教授を推薦したい）。

『地方の時代』映像祭は、昨秋第40回を迎え、今や「テレビドキュメンタリー」分野を支える、最大の『砦』となっている。同映像祭は19

80年川崎市で自発的な市民運動の一環としてスタート、その後故村木良彦氏の尽力による埼玉・川越市の東京国際大学での実施、市村元氏による大阪、吹田市の関西大学での実施と引き継がれ、着実に発展し衆目の認める存在に成長している。殊に昨今の咲く層・多様化する放送文化の状況の中で、この規模・内容を維持し得るのは市村氏の並々ならぬ熱意と苦勞のお蔭とおもわれ、その勞を讃えるには40周年の今回が最良と考える。

D テレビ金沢のNNNドキュメント『校歌』『コロナ禍に響け絆のうた』（1月24日深夜）を推したい。金沢市立小将町中学校の校歌をめぐる30分番組で、この校歌は作詩室生屋星作曲山田耕作の名歌。今どきの若者たちにその由来を新たに考え、大切に歌い継ぐべき名歌であると知らしむべし…という素直でやさしいドキュメント。とりわけて目新しくはないが好感をもつてみた。会員中崎清栄さんの作品。

E 『三島由紀夫VS東大全共闘 50年目の真実』。これは映画として製作され映画館で上映されているが、極めてテレビ的だ。見ればわかるが、全くの中継だ。当時は中継車を持ち込むことはできなかったで、フィルムカメラ何台かで撮り、モニタージュなしで2時間くらいの映画にしている。ほとんどの討論が再現されている。三島は好きではないが、映画は圧倒的に面白かった。フィルムはTBSのフィルム倉庫から発掘されたもので、放送人グループの対象ににくいかもしれないがアークイブの価値評価を含めてテレビの仕事として評価できないだろうか。

A 全国のケーブルテレビから、今年にはテレビ徳島『子どもの声が聞こえる』伊座里の365日。徳島県の伊座里という漁村で、子どもが全くいなくなっているのだが山村留字を

利用して子どもを呼んできた。その1年間の記録。コロナの最中だがコロナを全く感じさせない暮らしのリズムを丹念に記録している。記録する執念を感じるいい作品だ。

【ラジオ】

B 南海放送ラジオ報道特別番組「**感染と正義とは何か**」(5月30日 14時~45分)。

新型コロナウイルス感染者やエッセンシャルワーカーへの直接的、間接的な差別や誹謗中傷が相次いでいる。愛媛県内で起こった複数の問題を起点に、その背景にある一人一人の「正義」に迫る。約100年前のお遍路さんに対する感染症差別という負の歴史にも光を当てた。

文化庁芸術祭ラジオ部門大賞、民放連ラジオ報道番組最優秀賞。

C 文化放送 戦後75年スペシャル「**封印された真実 軍属ラジオ**」(8月15日、18時~57分)。昨年「戦争はあった」でアーサー・ビナードが東京にある戦争の跡地を何力所か訪ねた番組の中の1本。文化放送の川口送信所施設の地下に隠蔽放送局があり、1945年、アメリカが日本に対して行っていた「プロバガンダ・ラジオ番組」を聞かせないよう、ジャミング・妨害電波を放射していた。ラジオが兵器であったことをラジオで伝えた番組だ。

D アーサー・ビナード氏は昨年個人賞を受賞、2年連続はない。

E 東京FM「**コロナとホテルとラインチャット**」(11月15日)は担当Pが実際にコロナに罹ってラジオドラマにしている。ドラマといっても陽性患者がラインチャットを使つてのドキュメンタリードラマだ。コロナの中で新しいラジオドラマの形をみつめた。芸術祭ラジオ部門優秀賞。

A 「**村上RADUOステイホームスペシャル**」**「明るい明日を迎えるための音楽**」(5月22

日)。「村上RADUO」はもう5年目に入つて行くが、2ヶ月に1回のペースでとっている。今年度は年末にもとり、コロナのせいで村上春樹氏の自宅でもとった。月1でもいい、と楽しい番組にすつかり定着している。

B 「山下純」とアルミカンの今夜もバイヤフリーFUNK「ラジオ大阪5月25日」。全盲で肢体不自由のミュージシャン山下純と女性漫才コンビアルミカンの障害者やその介助者にインタビュして日常の様々な「バリ」について考える。民放連賞準グランプリ。

【座談会の次第】

日時 2021年1月29日(金)
午後2時~5時半
場所 千代田放送会館7階会議室
出席者

小川和久、伊藤雅浩、鈴木嘉一、
新山賢治、菅野高至、前川英樹、三原治
八木康夫、渡辺紘史、
河野尚行、鈴木典之、藤久ミネ
書面参加



写真撮影 深尾隆一

放送人の会 これからの事業活動、 そして皆さんにお願い

事業委員長 渡辺紘史

2021年1月末、世界の新型コロナウイルス感染症者が一億人に達し、2月1日、東京の感染者累計は10万人となり、4日、全国の死者が6000人を超えた。日本での感染が始まつてちょうど1年、今も変わらず、世はコロナ禍の中にある。緊急事態宣言は3月7日まで延長されることになったが、その3月7日は、当会主催・放送番組センター共催事業「名作の舞台裏・NHKスペシャル 未解決事件 ファイル7「警察庁長官狙撃事件」の実施日である。昨年のちょうど今頃、放送番組制作をはじめ、不要不急とされる文化事業は、続々中止や延期に追い込まれた。当会の事業も、3月10日の「人気番組メモリー・笑点」は無期延期となり、5月の総会は電子書面による総会に変更、同日予定された「放送人グランプリ贈賞式パーティー」は中止を余儀なくされ、受賞者と会員が集い、作品をたえ、受賞の喜びを語り、放送文化への期待を高め合う「放送人グランプリ」の醍醐味を味わうことができなかった。緊急事態宣言下の今、事態良化の兆しが見えるようだが、予断は許さない。3月7日、予定通り実施できることを祈るばかりである。

2021年度事業活動

昨年秋からの議論は、会の様々な活動(事業展開)を一体的、連携的、組織的、効率的に

行うことにより、それぞれを改めて点検し、発展的に活生化しようとするものであった。(会報前号参照)

*とりわけ、「放送人グランプリ」は、その実施上の効果(会報掲載の下馬評座談会)↓会員投票↓選考委員による選考↓受賞者へのコンタクト↓贈賞式における交歓や、他事業に及ぼす効果(名作の舞台裏や人気番組メモリーの企画元として・受賞者の証言を録取する等々)から、活動全体の起点になるものと考え、事業の中心に据え、事業委員長がグランプリ事業についても全体的責任を持つという事になった。したがって、「2021年放送人グランプリ」は、事業委員長がグランプリ委員長を兼ね、会が一体として実施していくことになる。そのことで会の活動をより活性化するとともに、グランプリの社会的有用性の認知度を高めたいとの狙いだ。ただし、実施そのものは、継続性を重視し、グランプリ委員や大山勝美賞選考委員も基本的に前年度のメンバーを中心にこない、これまで同様、贈賞式は5月の総会に併せ開催する予定である。

*「放送人の証言」「放送人の記録」「ドキュメンタリーワールド」「ラジオ開き酒の会」「放送人句会」などの事業も、それぞれのグループがそれぞれ計画を立て実施してきたものを、「お互い声かけあつて」活動することで、企画全体を再構築していくことになる。

*放送番組センターとの共催事業については、昨年の議論(コロナ後の事業の多様化、放送100年12025年に向けた企画)を踏まえ、共催事業のありようも含め、新規提案を行ったが、2021年度はこれまで通り「名作の舞台裏」「人気番組メモリー」を続けてほしいという番組センターからの強い要請を受け、3月には覚書を交わし、実施計画を立てることになる。いづれにしろ、共催事業は、視聴者に

対する放送理解のためのサービス事業であり、その企画実施に対して企画料が発生し、結果として当会の収益事業となるものだが、この事業（所謂テレビに出る人（出演者＝芸能人）の参加が必須であることに加え、当会独自の判断で企画が成立しないところが難物である。以上の事業は、今後コロナ感染の更なる波が襲来しない限り、2021年度、予定通り実施される。

以下、参考として毎回の理事会に提出される「2020年度の事業・活動報告」（2020年2月時点）を載せる。この表は、私が理事になった時から存在するもので、確か当時事業活動を仕切っておられた荻野慶人さんが枠を作成したとき、それこそ、継ぎ足し、継ぎ足しを重ねた秘伝の表である。2021年度は、新しいメンバーが交代、追加され、新たな事業が追加されてゆくことになる。

放送人の会の事業 これから（2022年度以降）の課題

2022年以降の事業である。以下、私見も含め、イメージを述べる。

4年後の2025年は放送開始100年にあたる。会の事業活動を「放送100年」に集（シフト）してゆく必要があるのではないかと。昨年200人を超えた「放送人の証言」の出版化企画は、会報前号で詳述されたように、まさに放送100年企画であり、2021年度は、これまでの証言に加え、グランプリ受賞者からの証言採録、名作の舞台裏の採録などにトライしてゆこうとの考えだ。2022年以降はもう一歩進め、これまでの証言に足りない放送現代史（衛星放送や90年代のデジタル化以降の様々な展開、例えば、放送とNETとの攻防史、ローカル放送史、放送法制史等々）

2021年度(R.2年度)の事業・活動			
	担当	実績	事業内容
名作の舞台裏 人気番組メモリー	渡辺 佐々木 (彰)、八木 逸見、石橋 (映)、柏木	¥451,410	R1.12.14 第48回「花へんろ特別編・春子の人形」(NHK) R1.12.14 第49回「29歳のクリスマス」(CX) R3.3.7 第50回「未解決事件File.07 警察長官狙撃事件」(NHK) R2.3.10→延期「笑点」(NTV)
放送人の世界 ドキュメンタリー ワールド	今野、前川、菅野 小池、矢島、河邑、 鈴木 (典)	¥138,011	第21会R1.12.8 土井裕泰 (上智大学中央図書館L号館)
放送人グランプリ 大山勝美賞	西村、八木 事務局	¥1,132,029 ¥353,525	放送人グランプリ 2019 (第18回) 5.18 千代田放送会館 放送人グランプリ 2020 (第19回)
放送人の証言・収録	工藤、隈部、加藤、北村 近藤、矢島、石橋 (映) 吉田、戸田、千葉、小川	¥665,741 ¥531,136	195回小澤英輔 (聞き手・近藤、吉田) 196回吉岡雅春 (聞き手・戸田、隈部) 197回工藤英博 (聞き手・石橋 (冠) 小池) 198回村上雅通 (聞き手・戸田、吉田) 199回山田良明 (聞き手・工藤、近藤) 201回中尾幸男 (聞き手・矢島、工藤) 202回橋本佳子 (聞き手・吉田、工藤) 203回曾根英二 (聞き手・戸田、工藤) 204回永山節子 (聞き手・戸田、工藤)
放送人の証言 出版プロジェクト	今野、河野、隈部、北村		東大と共同企画検討中
ラジオプロジェクト	前川、深尾、千葉、小川 田中 (秋)、三原、永田、 木原、松尾	¥40,000 ¥20,000	ラジオ聞き酒の会R1.6.5, 7.30, 10.10, 12.17, R2.1.27
情報交換交流	石橋 (冠)、吉田、渡辺、村上、曾根		
放送人句会 (隔月)	深尾、伊藤 (雅)	¥103,233 ¥55,685	第75回6.3 第76回8.6 (星野講師) 第77回10.1 第78回12.3 (星野講師) 第80回4.6 第81回 10.5 (星野講師)

の証言採録をしていくのはどうだろうか。会員各位、現役の皆さんも含め証言をお願いし、上記テーマ別でもいい、あるいは年代史として年別に括るのもよし、ホワイトボードに会員各自がマーカーを張り付けるような作業で、そんなことができないか、と考える。会報への投稿や、自撮りの録音録画でもいい、編集プロジェクトが、それらをまとめ、出版化にもつなげる。放送100年史の結びを飾ることになるに違いないと思うのだが。

もう一つは、名作の舞台裏のような、上映とシンポジウムのイベント事業として、番組ジャンルごとに、「放送100年 番組史」を時代でくくる企画ができないかとの提案だ。これは、一般視聴者にメディアアリティとして観てもらおう企画で、ドラマで言えば「大河が写す時代の鏡」朝ドラのヒロイン像（東芝日曜劇場とホームドラマ）（2時間ドラマの消長）（テレビドラマの系譜）懐かしき定番時代劇等々、テーマ別、4年計画で実施したらどうか。他にも、様々な考えがあるろう、皆さんの提案も求めたい。

さて、放送人の会は、2021年以降、組織一体となって事業を進めていくとしたが、本来、放送人の会は個人が個人として参加し、個人の意思で情報を発信することが本旨である。昨年役割を終えたとして参加を取りやめた「日韓中テレビ制作者フォーラム」は、会員の村上雅通さんが、九州や韓国のプロデューサーたちと、会員に声をかけ、会の事業として実現したものであり、共催事業「名作の舞台裏」も大山勝美さんが、放送番組センターに熱心に持ちかけて今に至っている。その他、「放送人の記録と作品」や「ドキュメンタリーワールド」、その他の企画も、会が決めたのではなく、会員個人の発想で始められたと聞いている。ところが、ここ数年、そうした個人からの提案

を耳にしない。私としては、会員間の情報交流を活性化し(例えば、会報の開放、常時紙面を開放し、幅広く投稿を呼びかける)、会員とのキャッチボール(情報交換)を行い、新しい個々の企画の結実を図る必要があると考えている。

新しい活動に向けて、会員の皆さんにお願いしたいこと

前述したような、これからの会の事業を続けていくうえで、活動する会員が固定化し、事業が会の中に浸透しきれないことが悩みとなっている。そこで、多くの会員、特に若い会員の皆さんに会の活動への参加を呼び掛けたいのだが、その前に、参考になるかならぬかわからないが、私事を記してみた。

NHKでドラマを中心に演出制作の仕事をしてきた私は、ある時期から、組織人事の流れに抗えないまま、様々な放送業務に携わることになる。関連の出版社の退職を機に、どうせなら「放送の何でも屋」を極めてやろうとはかり、「ボランティアプロデューサー」を自称し、今までやったことのない、いくつかの放送関連団体の事業も含め、当放送人の会の活動をしてきたつもりでいた。しかし、この冬、コロナ禍の断捨離と称して、過去の日誌手帳等を整理し始めたところ、私がかつ、こつした活動をしているには、自分の思いばかりでなく、何人かの先輩たちとの「縁」があったことに気づいたのである。

今からちょうど30年前の1991年である。札幌の番組責任者から東京のドラマ部に戻っていた私に、当時会長に就任したばかりの川口幹夫さんから連絡があった。「札幌のグループの面倒を見てくれないか」という有無を言わせずの依頼であった。札幌のグループとは

「札幌ごもミュージカル」。川口さんが放送総局長時代からNHK交響楽団理事長時代まで、座付き作者としていくつかの台本を提供し、ポランド交流公演なども含め、その活動を応援していた劇団であり、札幌時代、私自身その公演を中継したことがあった。「会長になったら、やっているわけにいかない」当たり前である。私は従わざるを得なかった。以来3年間、いくつかの公演やレコード録音などに、舞台演出、監督として付き合った。毎回、公演前の教週間の週末は、札幌東京の間を往復した。航空チケットをもらい、劇団主宰者のお宅である病院の宿直室に泊まり、幼稚園から高校生までの少年少女の歌や踊りや芝居に熱中した。東京公演では、後援依頼のため、地元教育委員会を回り、学校を訪れてチケットを売り、文部省後援の申請をするなど、考えてみれば、今やっているボランティアのようなことを30

年前に経験していたことを思い出したのである。川口さんが、この放送人の会設立のきっかけとなった「ムスタン問題」に忤殺されていたころである。

もう一人、そのころ出会った人に、大山勝美さんがいる。当時、大山さんが、映画評論家白井佳夫さん達とはじめた「徳島テレビ祭」に、私が札幌に転勤する直前の仕事であった連続テレビ小説「青春家族」が招待された時に、「手伝ってみないか」と言われ、その後数年間、NHK関連の受賞者の推薦、受賞式へのアテンションなどを手伝ったことがある。徳島で、左右違った靴を履いて現れた大山さんに、電車の中で座っていて左右違いの靴に気づいた時の私の恥ずかしさ、慌てぶりを話し、お互いうち解けた途端に言われたことで、断りようがなかったのである。

バブルの余韻の中にあつたこの時代、当時資生堂社長の福原義春氏などが中心になって

「企業メセナ」なるものが言われ始め、天野祐吉氏が中心となり、当時の放送文化人たちが集まり、スコール(ラテン語で学校の謂、運動)として、「テレビ寺子屋」などのイベントをテレビリテラシー事業として始めていた頃でもあつた。今思えば、そのあたりの活動が当放送人の会の設立につながっているようにみえる。

この時代、放送界の心ある人達は、組織や年代の違いを超え、自由に往来し、本業の他に、所謂ボランティア活動をしていた。当時の私もその世界の隅っこを目撃していたのである。

ともあれ、今私が、この放送人の会にいるのは、「放送何でも屋」になってやろうとした自分の意志からではなく、30年前の2人の先輩たちに導かれたからなのかもしれない。ただ、15年前の入会の直接のきっかけは、先輩の萩野靖乃さんの「面白いことができるから、入ったら、届けは出しておいたよ」である。「ドラマのことは知らないから、君がすべてやっていい」と言われ、企画から脚本家選び、キャスティングまで、すべてやりたい放題やらせてくれた、35年前の広島発ドラマ「ふたたびの街」のCPであり、のちにNHK出版の私の3代前の編集局長であった萩野さんは、30年前、奇しくも当会設立のきっかけとなった「ムスタン問題」の時のNSへ部長だった。

最後にもうお一人、乱暴で説得力のある先輩がいる。石橋冠さんである。引き受けてから10年を超えた「名作の舞台裏」であるが、私の担当は、優しくも厳しい顔で言い渡された「これからは君に任せるよ」という、石橋さんのひとりで決まってしまったのである。

以上、長々と私事を述べてきたが、言いたいことは、こうである。

この世界には、乱暴で説得力のある先輩と、頼まれたら断り切れない後輩がいて、物事の動きの裏には、必ず両者の間の「縁」がある。

今、会の強化のための会員勧誘運動が実施され、今年度は、理事改選の年だ。重ねて言うなら、会員の皆さんには、先輩、後輩という縦の関係も、会社、同好の士という横の関係も、そして制作者、学者、批評家等、異業種間のたすき掛けの交流関係もある。あらゆる関係を手練り寄せ、声を掛け合い、ある時は乱暴で説得力のある先輩として、ある時は頼まれたら断り切れない後輩として、お互い声かけあつて、会の催しに参加し、会報の投稿要請を受けて原稿を書き、理事改選には、自薦他薦、積極的に応じてほしいと願っている。乱暴で説得力のある先輩ではなく、頼まれたら断り切れない、私からの頼みである。

ぜひ皆さん、会の事業に参加しましょう

新刊紹介



あの日鎌倉駅は雨の中にあつた

―私と私の時代とテレビジョン―

前川英樹氏の自費出版である。前川氏はTBSでTBS闘争を経験、メディア企画、国際室などを担当。「あちこち書きちらしたものを集めた」とあるが、TBSメディア総研の「メディアノート」、放送人の会のHPのブログなどで目にした人はあるだろう。中に出てくる人物、テレビ、本、店などなど、同世代の放送人としては自分を鏡でみる思いがある。(視)

祝 今野勉さん

文化功労者顕彰

昨年11月、「放送人の会」会長今野勉さんが、文化功労者として顕彰されました。後述のように、放送文化関係者としては初めての快筆です。「宮沢賢治・銀河への旅」の演出等に対して、ということですが。そこで今回は「今野勉」として特集を組み、多くの方々のコメントを頂戴して、寿ぎたいと思います。

文化功労者とは

文部科学省HPより抜粋
「学術と芸術の分野における最高の荣誉は、『勲章』である。文化功労者の対象に選ばれた者は、26年、『文化功労者年金法』が制定され、文化勲章受章者を含み、それよりはやや広い範囲に「特に功績顕著」な文化功労者が毎年選考されて、年金が支給されることとなった。

毎年文化審議会文化功労者選考分科会で選考される。文化功労者の対象に選ばれる者は、2017年までは毎年15人が原則であったが、2018年からは20人に増員されている。

2020年顕彰

令和2年度文化功労者に漫才師の西川きよし（本名・西川遼）氏など20名が決定し、11月4日、令和2年度文化功労者顕彰式において、出席された17名（内お一人代理）



高橋ひなこ文部科学副大臣より顕彰状を授与される今野氏

本制度は、我が国の文化の発展に関し、特に功績顕著な方々を顕彰するもので、昭和26年の制定以来、昨年度までに895名が顕彰されています。

2020年顕彰者

伊藤俊太郎（科学哲学者）
大石進一（応用数学者） 加藤沢男（体操）
木村大作（映画） 清滝信宏（マクロ経済学）
今野勉（放送文化） 三枝成彰（作曲）
酒井政理（音楽文化振興）

すぎやまこういち（作曲） 鈴木幸一（文化振興）
高橋秀（美術） 澤久雄（ブリックアート）
十倉好紀（物性物理学） 鶴沢清治（音楽） 三味線
西川きよし（漫才） 原島文雄（マカトロニクス）
副王茂十郎（能楽） 堀田凱樹（養生遺伝学）
森口邦彦（染織） 山口一男（社会学）

お祝いの言葉

大川光行

今野氏と私は、1959年TBS（当時ラジオ東京）に同期入社した。60年以上前の出会いだ。

入社後すぐ、今野氏はTVの制作部に配属となった。同じく制作に行った同期には村木良彦、実相寺昭雄、並木章（敬称略）などがいた。一方、私は一般管理部門や報道局勤務だったので、彼と職場を同じくしたことが一度もなかった。

彼は、配属されて間もなく社内企画に応募して自前の番組を作るなど、その才は当初から光っていた。その後も看板番組「七人の刑事」の演出を手掛けるなど大いに囑望されていたのだが、驚いたことに1970年、安保騒動まっただ中、テレビマンユニオンの創立メンバーとしてTBSを去る。

そういう訳で、同期と言っても、年に一度か二度、仲間と一緒に杯を交わす程度の交流になってしまった。芸術論を交わしたことも天下を論じたこともない。だが、彼と一緒にいるだけで楽しく、信頼できると感じる。彼の常ならざる表現力、行動力に驚かされるし、会えばその朴訥さに癒される。そんな彼を私は密かに畏敬の念をもって接し現在に至っている。

私はつい最近「放送人の会」の会員になった。

それまで誘われても断っていたが、今野氏が会長になったと聞いて入会する気になった。私が会員になったところで何の影響もなからうが、せめて畏友今野氏を底辺から支える一人でありたいと思ったからである。

勲章を貰うと人は喜ぶ。結構なことである。ただ、中にはその地位に長くいたというだけで叙勲される人がママいるのも事実だ。それに比べ文化功労者顕彰は、本当の実力者と評価された者への荣誉だと思ふ。長年にわたる活躍が評価されたうえでの本物の賞だ。誠に喜ぶべきであろう。80歳の半ばにあつて、今なお現役として活躍している今野氏に、今後とも一層の活躍を願って止まない。

先駆者・今野勉

萩野慶人

今から50年前の夏、「70年大阪万博」開幕まで後半年もない日本電信電話公社のパピロン「電気通信館」準備室は、（ハード）ソフト）など使い慣れない語句が飛び交い活気に充ちていた。

前年から囑託として準備を重ねてきた企画委員の萩元晴彦、今野勉（共にTBS）、谷川俊太郎（詩人）、恩地日出夫（映画監督）からディレクターチェアが、在阪民放の実行メンバーへ譲り渡されるのだ。総指揮をとる遠藤正介近畿総局長と浅野翼プロデューサーの総論と経過説明に続き、瀬木宏康（毎日放送）、澤田隆治（朝日放送）、水野匡雄（関西テレビ）、私読売テレビ）に分厚い企画書が配られた。

ワープロのまだ普及していない時代の青焼きプリントだが、今野の万年筆で綴られた挿絵入りの横書きA4版は読み易い。TBSの若手ADたちの同人誌「Da」で馴染んだ今野勉 という名は信頼感を持てる。

実用化の近い携帯電話やTV電話の展示場

を抜けると、広大なドームの正面にヨコ10米・タテ6米のワイドスクリーン、左右上方に中型が二面に拡がっているとあって、企画委員会の机上プランは忽ち私たちの演出プランとして立体化してゆく。

正面は、我が国初の超高層・雲が関ビル前の広場、右は京都の清水寺境内、左上に種子島埠頭、遠くを行く旅人との対話が成立して「これが、例えばニューヨークとかモスクア、バンコクだったら」と司会者の口調が弾む。半世紀後に勃発する新型コロナ・パンデミックで珍しくなくなったリモートインタビュやテレワークの原型ではないか。

大阪の男性と東京の女性が意気投合すると司会者が「お二人がもし結婚されたらどんなお子さまが？」と言う。透かさず東京のカメラが男性を大阪のカメラが女性の顔を撮って合成し「あら、眼はママ似で口許はパパそっくり！」で場内は大爆笑だ。

特別な珍事など起きなくていい、70年の現在がそのまま映れたいと唱える今野には逆らうことになるが、澤田や私はヤラセでもない、興奮や爆笑を巻き起こしたい。今野34歳、澤田と私37歳、それぞれの「テレビの青春」（今野の著書）であった。「秋さんや今ちゃんは今もう覗いたかな？」と思う時が度々あった。

ところが閉幕して驚いた。彼らは所謂「TB S闘争」を背景に退社した村木良彦たちと組んで、制作者による制作者のためのプロダクション「テレビマンユニオン」を旗揚げしたのだ。

その初仕事に国鉄の「デイスカパージャパン」キャンペーン番組を、読売テレビ東京支社営業部長の中野曠三が銀座の居酒屋で萩元と劇団四季の浅利慶太に勧めた。「遠くへ行きたい」である。その第一回を構成演出したのが今

野で、万博閉幕直後の70年10月6日に放送を開始した当番組は主題歌と共に今も好評を維持しており、類似の旅番組、散歩番組は日々のTV番組表を埋めている。「テレビマンユニオン」の「今野勉 技ぎで、わが国のTVの軌跡を語ることはできない。

表現者・今野勉を祝う

河野 尚行

「青いお空の底深く
海の小石のそのように
夜がくるまで沈んでいる
昼のお星は眼に見えぬ。
見えぬけれどもあるんだよ
見えぬものでもあるんだよ。」

早朝のこども番組「にほんごで遊ぼう」の中でしばしば紹介される金子みすゞの詩に触発されて、13年前に出版された今野勉著「金子みすゞふたたび」を久しぶりに本棚から取り出し再読はじめた矢先、今野さんの「文化功労者」の受賞を耳にした。

今野勉さんが「文化功労者」に指定されたのは演出家・放送ディレクターとしては本邦初の受賞には違いないが、今野さんは文章表現者・文字表現者としても超一流である。

「金子みすゞふたたび」もそうだが、2年前出版の「宮澤賢治再び」でもそうだ。

五感をフル動員しての徹底した現地取材、季節・時刻・太陽の位置や星の位置まで考慮した観察、そして関係者インタビューや文書記録の発掘と解説。それらを的確にメモし、マッピングし、相關図を明らかにした上で文章に落とし込む能力は飛びぬけている。

それは、生来の才能に加え、若い頃からのドラマのロケハンや旅番組「遠くへ行きたい」の

下見などで養えられたものであろう。いつも感心するのだが、ドラマなどの映像表現に優れたTVマンの中には、「ブッキュンユ」なプロの文筆家よりも、はるかに新鮮な角度で人間の心を捉える文章が書ける人が多い事だ。俳句なども上手である。

その中でも今野勉の作品は、独創的な着眼点と豊かな構想力に加え、言葉として適切でないかも知れないが、厳密な「調査報道」ともいえるリサーチ力で、その人物が心に秘めていた創作の源泉をも探り当てる。すると、その人と作品が一層深みを持つて、別の角度から光り輝き出す。見事という他はない。

人間の営みを時代の中で他者に伝えることを生業にしている我ら「放送人」の頭に、今野勉を頂いていることを誇りに思う。

文化勲章には賞金は出ないが、文化功労者には年金が出る。コロナ禍が収まったら、飲んだ後、最後におにぎりが出るいつもの居酒屋で、今野さんに、みんなして、ごちそうになるうではないか。

楽観の人

鈴木嘉一

読売新聞記者として今野勉さんに初めて取材したのは、「奇跡の人」で商業演劇の初演出に挑んだ1986年だった。大竹しのぶがヘレン・ケラーの家庭教師サリバン役で主演し、紺野美沙子がヘレンの母ケートを演じた。スクラップブックで当時の記事を探すと、舞台進出の談話が今野さんらしかった。

「僕はラグビーが好きだが、これはヘレンとサリバン先生が取っ組み合いをする、文字通りの格闘劇。それに、サリバンとケートという生まれ育ちも生き方も対照的な2代女性の青春ドラマであり、教育とは何かとの問題も含

んでいる。テレビドラマにはない、複雑な要素が詰まっている点に引かれて」

こう独自の解釈を語っていた。テレビとの違いについては「映像ならクローズアップを使ったりして、すべて自分で作り上げられる。舞台は結局、役者さん次第で、幕が上がったら見ているだけ」と言い、「ラグビーの監督みたいなもの」という比喩が腑に落ちた。

思えば、今野さんとはその出会い以来、20年のつき合いになる。読売新聞社を退職した2012年、放送人の会に入ったのも、代表幹事（現会長）だった今野さんに強く勧められたからである。

私は番組評などを書く文化部を離れた後、解説部次長、編集委員としてメディア全般を担当した。今野さんには番組の著作権問題から、2003年に日本テレビで発覚した視聴率不正操作事件、受信料制度の見直しも含めたNHK改革論議、2007年の関西テレビ「発掘！あるある大事典II」捏造問題まで放送界を揺るがす不祥事などが起きた際には、テレビマンユニオンにお邪魔して、意見や提言を聞かせてもらった。

どんなテーマをぶつけても、取材を断られたことは一度もなかった。学者や評論家たちとは異なり、制作者、表現者としての立場からの視点、論理を貫いた。話したい具体的な説得力があった。よくしゃべり、よく笑うのは酒席でも同じである。

インタビュの際も酒が入っても、今野さんの口から悲観的な言葉は聞いたことがない。いつ会っても明るく、何にでも旺盛な関心を示し、面白かった。

今野さんは「50年以上前、この会報36号の巻頭に「楽観は意思なり」と題した文章を寄せたことがある。「楽天的であろうとする意思と努力によってはじめて未来が拓ける」と書い

ている。今野さんのいう「楽観」は能天気ではなく、「意図と努力」を指すのである。誰もが真似のできることではない。

これも50年ほど前になるが、NHKのBSの番組として、ハードボイルドで名高い米国のミステリー作家レイモンド・チャンドラーの企画を持ち込まれた。今野さんと雑談をしていたら、「あのチャンドラーの番組をテレビで作れるとはね。これがテレビの面白いところ。テレビは何をやってもいい。自由なんだよね」と破顔一笑したのを覚えている。

ドラマであれ、ドキュメンタリーであれ、それらを組み合わせたドキュメンタリードラマであれ、「こんなに楽しいことはない」とばかりに、いつも嬉々として番組を作っているように見えた。

80世紀に誕生したテレビというメディアも番組を作るテレビマンたちも、鳥のように、風のように自由であれ――。

「楽観の人」は、半世紀を超えるディレクター人生でそれを体現してきたのだろう。

お祝いの言葉

千葉邦彦

今野さん、文化功労者の顕彰、誠におめでとうございます。放送人の会の一員として、大変誇らしく思います。ますますのご活躍とご健勝をお祈り申し上げます。

今野さんに初めてお目にかかったのは2012年春、私がNHK放送博物館(以下、博物館)に勤務していた時期でした。博物館の愛宕山ホールで放送人の会と博物館の共催イベント「放送人の世界 佐藤幹夫くんと作品く」を実施することになり、企画段階から本番まで今野さんと共同で取り組む機会に恵まれました。今野さんの指揮の下、2日間に亘る上映および対談の番組構成、演出プラン、配付資料作

成に至るまで周到かつ緻密に準備されてきました。今野さん、佐藤さんと一緒にテレビマンユニオンの会議室でも打合せを重ねました。のちに放送人の会の一員として同じ部屋で会議をするなどとは思ってもみないことでした。イベント当日は、ともにエネルギーシユな今野さんと佐藤さんの対談が白熱し、多彩な番組上映と相俟って観客を大いに惹きつけました。翌年、同じく今野さんの仕切りで実施した「石橋冠くんと作品く」と並んで、博物館でのイベントとして長く記憶に残るものになったのでした。

今野さんと次にお会いしたのは、2013年初夏の六本木。石橋映里さんが理事をされている日本脚本アカイブス推進コンソーシアムのパーティー会場でした。今野さんは同コンソーシアムの副理事長をなさっていました。私は博物館が協力団体であるということとパーティーに参加したのではなく、息子(千葉夏彦)が脚本の収集・管理の仕事に関わらせていただいていることの御礼を申し上げようと、開会前の短い時間にご挨拶に馳せ参じたのでした。山田太一さん(コンソーシアム理事長)とは博物館での文化講演会や番組収録の際にお目にかかっていましたので、この日もしばしお話しさせていただきました。夏彦は会場の受付をお手伝いしていましたが、持ち場を一瞬離れさせてもらい、山田さんと今野さんにご挨拶しました。夏彦がフランス革命を題材にした長編の歴史小説を書いていると申しましたところ、山田さんも今野さんも、「おっ!それは・・・」と関心を示してください。大変嬉しかったことを覚えていきます。親バカな私のきわめて個人的な話です。

さて実は、本稿を書き始めた時点では全く別の話。とっておきのエピソードを披露するつもりでした。それは「料理」をめぐる話

なのですが、紙幅が尽きたので、次の機会ためにとっておくことにします。

今野君の受賞を祝う

並木章

昭和34年(1959)春、僕たちは就職難の中、難関を潜り抜けて当時株式会社ラジオ東京(KRT)と言った今のTBSに一般職社員として入社しました。入ったのが42名。全員東早慶を中心にした在京大学の卒業生でしたが、中に唯一人東北出身の男が居ました。それが今野勉でした。極端な東京集中採用の中で彼は目立った存在でした。やがて講習が終わり配属先が決まる時大方はテレビ報道部か演出部を希望しましたが結果、演出に決まったのが6名。今野、村木良彦、高橋一郎、中村寿雄、実相寺昭雄、並木という顔ぶれで2年遅れてマスターに配属されていた吉川正澄が移ってきました。当時の演出部には40人もいましたでしょうか、舞台、映画、NHKから移ってきた人と種々雑多で新卒の私達はそれぞれ夜も昼も無く酷使されました。

やがて私達は時々その頃鶴木に住んでいた実相寺の家に集まりテレビの有り様について話し合うようになりました。その中で最も雄弁なのが今野でした。私も決して口数が少ない方ではありませんが彼には叶いませんでした。そんな事から生まれたのが「dA」という小冊子でした。これも多忙の中3号で終わってしまいました。時に舞台中継のDをやりながら「神風AD」を続けていましたが、入社3年、62年春NHKの「私は誰でしょう?」等の司会で有名な高橋圭三アナが民放転出第1号となりTBSで番組を持つという噂が社内には流れました。所詮私達には縁の無い話と思っていた所、突然今野、高橋、それに私の3

人が指名されました。私達は抜擢されたと思っていました。本当は先輩が皆逃げてそれでお鉢が回って来たのが真相のようです。テーマは「人間主義と言った所になりましたが、張り切った3人は討論の間に番組を流すという有様。3ヶ月で首になりました。後に高橋圭三氏が「私の目の前を灰皿が飛んだ」と評しましたが、それは大袈裟としても同期3人をDにすればそうなるのが当然で、これは上司のミスというより他ありません。今野はこの「圭三シヨ」にあまり良い思い出は無いらしく彼の経歴には一切述べられていませんが、私が彼と唯一仕事を共にしたのはこの「圭三シヨ」だけなので敢えて書いた次第、秘話ということにお許しあれ。そして再びADに戻った3人でしたが、やはり偉かったのが今野。2年後「王曜と月曜の間」で男を挙げました。「七人の刑事」等良い仕事をしていましたが、やがて萩本晴彦氏を中心に彼は村木、吉川等と「テレビマンユニオン」を創り、その後の活躍は皆さんご存知の通りです。実相寺も独立しました。62年の時日を過ぎた今、演出部同期の村木良彦、高橋一郎、実相寺昭雄、吉川正澄もこの世を去ってしまいました。この度の今野の慶事を天国から村木は「物静かに、吉川はあの「だみ声」で、高橋は「さつぱり」と、実相寺は「意味ありげな笑い声」で「今野よ!おめでどう」と祝っている事ですよ。

所で、この度の今野の文化功労者受賞は放送界初との事。この制度が出来たのが昭和26年。その前年にテレビはスタートしています。ラジオを含めれば100年近い歴史を有しているこの放送界を文化庁の小役人共は一体何と心得ているのか、受賞を喜び乍らも腹が立ちました。

今野勉についてはこれまでいろいろ書いてきた。何しろ若い時から注目された制作者だったし、論客だった。

彼は、自分のこともよく文章に書いて、有名な「お前はただの現在に過ぎない」は「TBS闘争」とその周辺を記録しながら自分について多くを語っているし、「TBS調査情報」に連載して本になった「テレビの青春」は自伝といつていい。

そこにある今野勉の自画像は、既存の権威や体制から離れた自由な立ち位置にいる人間である。若いときの彼は手持ちのフィルムカメラを多用した。スタジオの狭い空間の制約から自由になり、自由に動き回って映像を切り取る自由が彼には必要だった。

テレビマンユニオンという日本初のテレビ番組制作独立プロダクションをつくったのも放送局の官僚的な体制から離れて自由な立ち位置を求めたからだ。「そう長くはもつまい」と言われたテレビマンユニオンが今も健在なのは「自由な制作者集団」という発足時の理念を持ち続けたためだと思う。

制作者としてはドラマもドキュメンタリーも作った。テレビの可能性を広げるためにはジャンルにはこだわらない。「海は甦る」は放送局の編成がしり込みした長時間枠を彼の信念と粘りで実現させた。

「やらせ問題」が起こったとき、彼は世間のテレビへの無理解を痛感した。理解を深めてもらうにはテレビ制作の側から出て行くしかない。そうして生まれたのが「放送人の会」主催の「名作の舞臺裏」であり、彼自身は「テレビの嘘を見抜く」で「やらせ」を論じた。

「放送人の会」の会報の巻頭の1ページは今野会長が毎号書いているが、これを見ると彼

の活動の広さと視野の広さがわかる。放送界初めての文化功労者だそうだが、制作者としてだけでなく放送界への功労が大きかったという意味だと思う。聞き手、伊藤雅浩

テレビジョンの身体的—放送人の

世界—今野勉：人と作品 2010.3.20.

前川英樹

「放送人の会」の企画で「放送人の世界—人と作品」というシリーズがあり、第12回（3・20）は今野勉さんの作品だった（放送番組センター・横浜。今野さんの著書「テレビの青春」の読者から当時の番組を見たいという要望がかなりあり、それで連続企画になったという経緯を冒頭で今野さんが説明した。今回は、「土曜と月曜の間」（19964）、二人だけの銀座（七人の刑事）（1967）、「伊丹十三の日の出撮影大作戦（遠くへ行きたい）」（1972）、『パリの万国博覧会（天皇の世紀・第一部）』（1973）の4本だった。

「土曜と月曜の間」は私がTBS入社後の年の作品で、イタリア賞受賞後の再放送の時だったのだろうか、社内のモニターでチラと見た記憶がある。これと二人だけの銀座—オールフィルムの作品だ。当日の今野さんの弁によれば、「フィルムの方が、カメラが自由（それに編集も）だからそれでいきたいと上司の了解を取った」ということだ。確かに、当時のVTR機材はロケには全く不向きなレベルだった。そのお陰で、この2本は保存されることになったのだ。つまり、VTRテープはそれほど高価で、オン・エアーされ

ると次の番組用に使われ、録画されたものは消去されるのが通常だった。これはTBSだけのことではない。

二人だけの銀座（七人の刑事）は、今野さんがTBSを離れる少し前の仕事で、このあと今野さんは「TBS闘争」の渦中に身を置くことになり、その後退社してテレビマンユニオン結成にいたる。今野さんのTBSでの最後の作品は「残酷な午後」（七人の刑事）である。

そのあたりのことは「お前はただの現在に過ぎない」（田畑書店1969 再刊・朝日文庫2008）に詳しい。

その「TBS闘争」の一つの焦点が「テレビとは何か」であり、「テレビジョンは時間である」という提起あるいは問いかけがテレビに関わる人たち、つまり私たちに与えた影響は大きかった（もつとも、何の影響も受けなかつた人たちは沢山いたのだが）。

そうだとすると、オールフィルムという方法は非テレビ的ということになるのだろうか。この話題は、丁度1年前の「放送人の世界（村木良彦・人と作品）」のゲストとして参加したときに、村木作品におけるアクション・フィルムとコラーージュについて今野さんと会話したことに重なる。村木さんはテレビ表現について「モニターージュによる解体された時間ではなく、解体されない（時間）」「偶然を方法の中にくみこんだ意識の重層的反復を現在進行形で」と書いている（「テレビジョンの（歴史と）地理」・「ぼくのテレビジョン」1971所収。村木さんの場合は、テレビジョンという「時間のメディア」と、番組に内包される時間という二重の時間意識がテレビ論の核になっている。

今野さんのフィルムによる2作品を観て思うのは、今野さんにとってテーマ、というより（意図をよりよく表現する方法がフィルムだ、という明快な選択だということである。では、テレビ的であるかどうかは問題ではないのかと言うと、それこそテレビ的だしかな。映画の世界では、そういう方法の選択は成立しない。その選択こそ、第一にテレビ的であり、第二に撮影・編集・ダビングというプロセスを経て映像として定着したものは、テレビ番組以外の何ものでもない。

1982年（東京オリエンティックの年に、テレビで沖縄に向き合うとすればこうなる、と今野さんは決めたのだ。「土曜と月曜の間」は芸術祭参加のテレビドラマとして放送されたが、そこにはドキュメンタリーの方法が取り込まれている。というより、ドキュメンタリーとしてみることも充分成立する。要するに、それが「テレビ」なのだ。地上波テレビは総合編成を求められているが、こういう作品を観るとそういうジャンル規制は全く無意味だと思えてしまう。そういう固定観念がテレビをダメにしてきたのだ。それは、今野さん本人がいうように、「今野作品は社会派的だ」という批評にも通じる。

ゲストの堀川とんこうさんが「2年先輩の今野さんたちは、自分がテレビに向き合うときに夫々がテレビ以前に拠りどころにしてきた芝居や映画といった『へその緒』を残していたけれど、今野さんにはそういう感じがしない」と発言していた。「へその緒」なくなっても、表現の世界に入れる場がテレビだったのだ。だから、フィルムという方法とテレビ的であることは相反しない。

今野さんのフィルム作品を観ながら、アン

ラジオのページ

さだまさし著・小説「ラストレター」

はラジオへの熱いエールだ！

田中秋夫

トニーニやゴダールの映像を観た記憶が一瞬よぎったが、それは今野さんが彼らの影響を受けたかどうかという問題ではなく、あの時代に出来合いの形式を超えようとするならば、当然とられる方法だったのだと思う。久しぶりにネオ・リアリズムなどという言葉思い出した。ネオとはその頃新鮮な響きだったが、今ではネオ・コンなどというところにも剣呑な感じがある。

今野さんに「へその緒」があるかないかはいざ知らず、今野さんの作品にはすぐれて身体感覚がある。スポーツ経験があるからかもしれないが、それ以前のまさに「へその緒」的なものとして体を使うことの快感があるのだろう。私自身にそういうところがあるのでそう思うのかもしれないが、現場とは身体で自己表現する場なのである。「伊丹十三の日の出撮影大作戦」も「バリ万国博」もそれを心地よく感じた。特に、「バリ万国博」は伊丹十三という稀有な存在と共鳴して、踊るようなリズム感がイイ。身体性は制作者の一つの必要な資質だと思ふ。それにしても、「放送人の会」は結構いい仕事をしているのだが、どうすればパワーアップできるかが問題だ。それは、散会後に今野さんも交えてビールを飲みながらの話題でもあった。テレビそのもののパワーダウンの中で、「放送人の会」が遊びと運動を上手く組合わせて刺激的になると良いのだろうか、上手い手が見つかるだろうか。

初出 TBSメディア総研HP 2014.3.
2010.4.1. 再掲に当たり、一部修正した。

今や「国民的人気アーティスト」とでも言うべき存在のさだまさし君(以下まっさん)が、今年も大晦日から元旦にかけてTV・ラジオで獅子奮迅の大活躍だった。

12月31日19時半からのNHK紅白歌合戦に2007年以来13年ぶりに出演し、フルオケストラをバックに「奇跡・2021」紅白バージョン」を歌った。

この歌はアルバム「家族の肖像」に収められた「奇跡」大きな愛のように」をセルフカバーしたもので「どんなにせつなくても必ず明日は来る。長い坂道を登るのはあなた独りじゃない」と歌い、コロナ禍で苦しんだ多くの人々へ「苦しくても絶対にあきらめないで」のメッセージが込められていた。

さらに同日の夜10時から3時間は文化放送で恒例の年越し特番「さだまさしカウントダウンSP」に出演。今回で12年連続のこのだが、コロナ禍の為、国技館は中止し、都内某所から無観客ライブを代行。そのサブタイトルは丑年にちなんで「ステキな、ハラミたす(腹満たす)生ミノうた！元タンまで、よけレバー、よロースくー！」とあり、まっさんが好きな駄洒落に溢れていた。

これに続いて午前0時20分からはNHK TV恒例の「新春生放送！年の初めはさだまさし」に出演。これは特番「今夜も生でさだまさし(通称・生さだ)」の元目版で、TV番組と言うよりもラジオ番組をTVのスタジオから

ら放送しているといった設定になっている。2001年にNHK長崎で実験的に放送された「さだまさしの見るラジオ・聴くテレビ」を定番化したのだというが、スタジオセットは明らかに低予算の番組と解る。経営合理化・受信料引き下げを求められているNHKにとって模範とすべき番組とも言えそう。

この番組で視聴者からの投稿をハガキに限定しているのも私が文化放送で担当していた「さだまさしのセイヤング」と同じで、彼の鉄則「葉書に思いを込めて書くと、本当に伝えたい怒り、悲しみは滲む。僕はメールやFAXは読まない」を守っている。

確かにSNS全盛の現在、若者たちのコミュニケーションはメールが中心で手軽にやりとりしているが、炎上も多発しているとも聞く。前述した彼の「セイヤング」を私が担当したのは番組がスタートした1981年からだった。

文化放送が深夜の時間帯を改編し、月々金ベルトの「セイヤング」を終わらせ、女子大生による「ミス・D」をスタートさせることにしたが、その情報を耳にしたまっさんが局の上層部に「セイヤングの灯を消さないで下さい。僕に放送枠を下さい！」と掛け合った。彼は少年時代にヴァイオリンを学ぶ為、故郷の長崎から上京し独り下宿生活をしていて、その孤独を救ってくれたのがラジオの深夜放送だったという。交渉の結果、彼の熱意に折れて上層部が土曜日23時からの90分をさだまさしの「セイヤング」にすると決めた。そして彼のデビュー当時の番組「グレープのセイヤング」を担当したという縁もあって、私とその番組の初代担当になった。

しかし、その新番組はスタートから波乱の連続だった。その頃の彼は「雨やどり」や「関白宣言」等

発売する曲が次々にヒットし、年間160本を越えるコンサートを行う等、超多忙なスケジュールに追われていた。

にもかかわらず彼は「ラジオは生放送だからこそスナードと繋がる」と「生」に拘っていた。その為、我々スタッフは彼のコンサートを追って全国各地の放送局を渡り歩くことになったのだ。

それは正に「さだまさし主演の旅芸人一座」の座長になった気分だった。

まっさんの書いた小説に「ラストレター」がある。「週刊朝日」に連載され、2014年に朝日新聞出版から単行本として発売されたが、内容は彼自身が担当したその番組「セイヤング」をそっくり小説化したものになっている。

本の帯には「文化放送『さだまさしのセイヤング』を12年半続けた経験にもとずく、心温まる深夜ラジオ小説」とあり、さらに「たった1枚のハガキが、人気低迷に苦しむラジオ番組を変えてしまう」とある。

読んでみると当時の文化放送制作スタッフの個人的な人物像や社風まで活写されている。小説のタイトル「ラストレター」も当時の彼の番組内コーナーの名称そのものである。

主人公が新番組の企画意図を上司に説得するシーンでは「人々は自分が小さな人生を生きているってみんなわかってるんです。でも一山いくらじゃないです。そんな小さな人生を伝えたいと誰もが思っている筈です。そんな葉書を小声でただひたすら愚直に読んであげるのはどうでしょうか」とも語らせている。

また当時の番組内で彼の語りによる講談調のドラマ「三国志英雄伝」を放送していたが、小説の中でもそれが再現されていて、主人公に「ラジオは音声だけのメディアだから送り手と聴き手が共同作業で脳のイメージをやり

筆者はネット利用を一概に否定するつもりはない。しかし、誰でもどこでも受信機（ラジオ・スマホなど）さえあれば、気軽に利用できるラジオの利点をなくしてしまうことには大きな疑問がある。

またR2が放送しているのは語学番組だけではない。特に外国語によるニュースは貴重な情報だ。英語、中国語、ハンブルグだけでなく、ロシア語、スペイン語、ポルトガル語、ベトナム語、インドネシア語、タイ語など、様々な言語でニュースが放送されているのをご存知だろうか？

現在日本には、280万人以上の在日外国人が暮らしている。彼らに最新のニュースを提供しているのは多国籍時代の公共放送のあり方としては欠かすことのできないものだ。

首都圏では外国語放送のインターFMが経営不振によりJFNに事業譲渡されたことにより、外国語放送がCM収入によって経営を成り立たせるのは現時点では困難に近い。だからこそ、受信料によって運営される公共放送の、「かけがえない使命」ともいえる。

また「視覚障害者ナビ・ラジオ」などの福祉番組や、文化講演会、古典講読などの文化番組はNHKでなければ放送することは難しい。これらの放送をNHKはどうするつもりなのだろうか。

そして大災害時に「広く、あまねく」情報を伝えるには、現在のラジオ3波体制をなんとしても維持しておかなければならない。第一（R1）では日本人向けに、R2では外国人向けに災害情報・生活情報を伝えることができる。そして東日本大震災でも実施したように、FM波では膨大で詳細な安否情報を伝えることが可能になるからだ。

そもそも今回の受信料値下げは、私たち利

用者からの要請ではなかった。菅政権の目玉政策として、携帯電話料金値下げとともに持ち出されたものだ。またもし仮に番組制作費の削減が必須だったとしても、ラジオ波の削減では微々たるものであることを忘れてはならない。

もし本当に制作費の削減が目的ならば、多くの人が見ることができない8K放送の削減こそ真っ先に取り組まねばならないはずだ。残念ながらラジオ波削減に反対する声は、NHK内部からほとんど聞こえてこない。NHKOB・OGの多い「放送人の会」からこそ発信することが必要だと強く願っている。

訃報 鴨下信一 2021.2.10没

享年85。死因肺炎。1958年TBS入社。「東芝日曜劇場」でのドラマ、「岸部のアルバム」「ふぞろいの林檎たち」など多数の作品があり、著作も多数。

編集後記 ▼ 放送人グランプリ受賞者の方に

寄稿をお願いしたところ素敵な原稿が集まり、「グランプリをやっていて本当によかった」と思いました。事業計画ではこれまでの事業を見直し多角化、活性化につなげようという提案されていますが、その第一歩です▼年頭所感 下馬評座談会、今野さんの文化功労者顕彰、と大きな記事が入り、分厚い会報になりました。下馬評座談会のための菅野さんの労作の資料も分厚い別刷りになりました。印刷代の予算の心配は無用だそうです▼吉田賢策さんが交通事故で大怪我です。皆さんもお気を付けのほどを。 **視**

会員名簿

2021.2.16 現在

【あ】 藍澤幸久 相田洋 相本芳彦 青木裕子 青山悌三 秋田和典 天野證範 雨宮望 新井和子 【い】 池田正之 石井彰 石井ふく子 石田研一 石橋映里 石橋冠 石原信和 磯智明 板谷駿一 市岡康子 市川哲夫 市村元 伊藤博文 伊藤雅浩 井上佳子 井上良介 今井義典 岩澤敏 岩瀬弥永子 【う】 上村忠 浮田周男 臼杵敬子 【え】 江川雄一 江口展之 遠藤利男 遠藤雅充 【お】 大池雅光 大川光行 大沢悠里 太田昌宏 大類なざさ 緒方陽一 岡野真紀子 岡室美奈子 岡本勉 小川治 小川和之 小河原正巳 沖野瞭 萩野慶人 尾田晶子 織田晃之祐 【か】 加賀美幸子 柏木登 片岡敬司 加藤滋紀 加藤拓 加藤義人 金平茂紀 川平朝清 鎌内啓子 亀谷弘美 川喜田尚 川口健一 川淵恵子 河邑厚徳 【き】 北川泰三 北川信 北出晃 北村美恵 北村充史 木下浩一 木原毅 木村成忠 【く】 工藤英博 隈部隆生 倉内均 訓覇圭 黒崎博 黒沢淳 【こ】 小池勝次郎 河野尚行 小玉滋彦 後藤和晃 小山帥人 近藤邦勝 今野勉 【さ】 斎藤秀夫 斎明寺以玖子 寒河江正 坂元良 江 桜井均 桜井元 佐々木彰 佐々木光政 笹山正勝 佐藤敦 佐藤幹夫 佐藤理恵子 佐野有利 澤田隆治 【し】 重延浩 重村一 重盛政史 静永純一 柴田陽一郎 清水誠 志村一隆 下崎寛 下重暁子 下村幸子 白井博 新山賢治 【す】 菅野高至 菅野嘉則 杉田成道 鈴木俊樹 鈴木典之 鈴木弘貴 鈴木芳夫 鈴木嘉一 須磨章 【せ】 清野豊 関佳史 せんぼんよしこ 【そ】 曾根英二 【た】 高島秀之 高田宏 竹中一夫 田澤正稔 多田健 田中昭男 田中秋夫 田中直人 田中典子 田中則広 田原茂行 【ち】 千葉邦彦 【つ】 塚原あゆ子 塚本茂 塚本幹夫 辻本昌平 土屋敏男 つボイノリオ 露木茂 鶴橋康夫 【と】 東城祐司 戸田桂太 富沢一誠 豊原隆太郎 鳥谷規 【な】 長井展光 中尾幸男 中込卓也 中崎清栄 中島僚 中島由貴 永田浩三 永田俊和 永野敏一 中町綾子 中村敦夫 中村克史 中村季恵 中村美美子 中山和記 並木章 【に】 新村もとを 西憲彦 西村与志木 仁田豊文 仁藤雅夫 二宮文彦 【ぬ】 沼田通嗣 【の】 延江浩 信井文夫 【は】 萩原豊 林健嗣 林宣昭 林安二 原田令嗣 【ひ】 日笠昭彦 玄武岩 【ふ】 深尾隆一 藤井チズ子 藤井正博 藤田知久 藤久ミネ 藤村忠寿 古川重樹 【へ】 逸見京子 【ま】 前川英樹 牧之瀬恵子 増山麗央 松尾羊一 黛りんたろう 丸山友美 【み】 三上義智 水上毅 水野憲一 光原朋秀 三原治 三村景一 三村千鶴 宮崎洋 宮川鏡一 【む】 村上光一 村上雅通 村上佑二 村田亨 【も】 本木敦子 元田成 諸橋毅一 【や】 八木康夫 矢島良彰 藪内広之 山鹿達也 山崎隆保 山崎裕 山路家子 山田尚 山田良明 山根基世 【よ】 吉澤保 吉田賢策 吉村豪介 吉村直樹 【わ】 和崎信哉 渡辺浩平 渡辺紘史

【賛助会員】 日本民間放送連盟 TBSメディア総合研究所 融合研究所 日本ケーブルテレビ連盟